

新庁舎落成記念号



名古屋高裁・地裁庁報

1979.7

新庁舎落成記念号

目次

新庁舎落成式から	
式	辞……………岩 野 徹… 1
祝	辞……………服 部 高 顕… 3
祝	辞……………長 島 敦… 4
祝	辞……………石 原 金 三… 5
祝	辞……………仲 谷 義 明… 6
祝	辞……………本 山 政 雄… 7
名古屋裁判所庁舎竣工に際して……………栗 本 一 夫… 9	
新庁舎落成にあたり……………高 澤 新 七…10	
新庁舎に思う……………三和田 大 士…11	
新庁舎の敷地……………内 藤 頼 博…12	
新庁舎建設委員会での協議あれこれ……………井 上 正 弘…14	
新庁舎所感……………伊 藤 淳 吉…16	
<俳句>俯瞰五句……………戸 塚 笙 子…18	
新庁舎の落成を聞知して……………浅 香 恒 久…19	
外堀から丸の内へ……………加 藤 義 則…21	
新庁舎落成に思う……………鳥 居 賢…25	
新庁舎の工事経過報告について……………足 立 登…26	
新庁舎の落成によせて…………… XXXXXXXXXX …30	
主税町から三の丸に……………柴 田 菊二朗…32	
<俳句>新旧庁舎十句……………鬼 頭 弘…34	
民事記録庫の移転……………坪 内 清 彦…35	
庁名碑雑感……………朝 日 晃…37	
編集後記…………… XXXXXXXXXX …38	

写真…高田祐吉(地民次席書記官)
カット…鈴木 康(高刑記録係長)

式 辞

名古屋高等裁判所長官 岩 野 徹

名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所、名古屋簡易裁判所及び名古屋第一、第二検察審査会合同庁舎の落成式をとり行います。栗本最高裁判所判事をはじめとして、来賓多数の方々には、御多忙にもかかわらず、御臨席を賜りまして、まことにありがとうございます。

顧みますに、大正十一年九月に建設されました旧庁舎は、ルネッサンス風赤煉瓦の建物として、長く名古屋市民のほか多くの方々の中に親しまれてまいりましたが、歳月には勝てず、近年とみに老朽化が目立ち、かねてから庁舎の新築ということが、内外から強く望まれておりました。幸い名城西小公園のあった現在地が、多少の曲折を経て、昭和五十年六月、裁判所新庁舎の敷地として、確定されるにいたしました。

新庁舎の敷地は、旧庁舎のそれと比べますと、相当狭少とはなりましたが、郭内官庁街の中に位置し、名古屋市民の象徴ともいふべき名古屋城の真南にあたり、多くの緑に囲まれたまことに恵まれた環境にあります。まさに司法の殿堂の敷地として、この上なく申し分のない場所であります。

名城西小公園が、新庁舎の敷地として確定されるにつきましては、名古屋市当局の御好意と関係諸官庁、弁護士会等の多大の御理解と御尽力を賜りました。ここに心から御礼申し上げる次第であります。

新庁舎は、現代建築の粋を集め、近代的設備を完備した最新の建築物であります。まず内部では、階層の異なる法廷群と事務室群とを東西に二分し、これを中央部分で結合させることによって動線の明快な分離と結合

が図られ、これが地上十二階、地下二階の一棟の建物として、簡潔にまとめられております。また耐震、防火面でも嚴重な配慮がなされ、最新の設備を備えて、関係者の安全確保に、充分な注意が払われております。さらに外観の特徴といたしましては、御覧のとおり、充分にゆとりのある採光窓と、格子模様による外壁構成をとり、これを煉瓦調タイルでまとめ上げることによって、裁判所にふさわしい重厚さと気品・風格とをかもし出すとともに、周囲の環境との調和、殊に城郭内の緑との対照美にも充分配慮してありまして、いろいろな角度からみて、苦心の作ということができると思われます。

なお、新庁舎の外構工事では、環境にふさわしい緑化の課題を最も重視してあり、旧公園の樹木をできるだけ生かしたほか、多くの植栽を試み、なかでも名古屋城に面した北側の造園には、十分な注意が払われております。

このような立派な建物と外構について、長期にわたって設計と監理の両面に携ってこられた建設省中部地方建設局の方々に、敬意と感謝の意を表します。また数多くの工事関係各社の皆様には、優れた技能を注がれ立派に工事を完成されました。まことにありがとうございます。

新庁舎建設という永年にわたる我々の希望が成就した今、私どもはこの新庁舎を将来にわたって大切に管理していく決意を新たにするとともに、それよりもまして、公正かつ迅速な裁判を通して、裁判所に課せられた職責を果たすことを、あらためて誓うものであります。

祝 辞

最高裁判所長官 服 部 高 顯

本日、ここに、名古屋高等裁判所、同地方裁判所、同簡易裁判所、同第一及び第二検査審査会合同新庁舎の落成式が挙行されるに当たり、お祝いを申し述べる機会を得ましたことは、私の最も喜びとするところであります。

旧庁舎は、大正十二年以来半世紀にわたり司法による正義の実現に寄与し、また、赤れんが造りの建物として広く人々に親しまれてまいりましたが、年ごとに老朽と狭あいの度を加え、執務環境としては必ずしも良好とは言いがたく、かねてから新庁舎の建設が強く望まれておりました。

幸いにも、この念願が実を結び、この度、由緒ある名古屋城郭内のこの地に、周囲の環境との調和にも配慮し、近代的かつ最新の設備を完備した機能的で品位のある庁舎のしゅん工を見るに至りましたことは、御同慶に堪えません。新庁舎の落成について心からお祝いを申し上げますとともに、その建築に当たり、多大の御支援と御協力を賜りました関係各方面の方々に對し、深じんの謝意を表する次第であります。

申すまでもなく、裁判所に課せられた使命は、具体的な紛争の適正かつ迅速な解決を通じて国民の権利の擁護と法秩序の維持を図ることに尽きるのであります。この使命の遂行に当たる私どもは、これまで万遺憾なきを期してまいりましたが、昨今の社会情勢を反映して、裁判所の取り扱う事件も、従来にない複雑困難な問題を含むものが多くなる傾向にあります。私どもといたしましては、従来にも勝る工夫と努力によって適正妥当な事件の処理を図り、もって国民の裁判所に寄せる期待と信頼に十分こたえるよう懸命の努力をすることが肝要であると思ひます。

裁判官をはじめ職員各位におかれては、この喜びの日を契機として決意を新たにされ、それぞれの職務に一層精励されますよう切望してやみません。

また、御臨席の各位におかれましては、司法の重要性を深く御理解くださいまして、今後とも、裁判所のため一層の御協力を賜りますようお願い申し上げます。

これをもちまして、私の祝辞といたします。

祝 辞

名古屋高等検察庁検事長 長 島 敦

本日ここに名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所、名古屋簡易裁判所、名古屋第一、第二検察審査会の合同庁舎の新築落成式に当たり、祝辞を申し上げる機会を与えられましたことは、私の最も光栄とするところであります。

大正十二年以来五十余年にわたって幾多の歴史をつづつて参りました赤煉瓦の、壮嚴な旧庁舎も、時の流れとともに狭隘かつ老朽化し、執務上多大の支障となっていたのでありますが、このたび、名古屋城郭内の風致地区の、この恵まれた環境に、司法の殿堂にふさわしい壮重かつ、重量感にあふれる新庁舎が完成しましたことは、法曹の一人として何よりの喜びであります。

この新庁舎は、法廷棟と事務棟が明確に区別されており、しかも、法廷と事務棟をつなぐ、法廷棟専用エレベーター等が設置され、弁護士控室のほか、訴訟関係者、傍聴人の待合所等にも行き届いた配慮がなされているのでありまして、法廷数の増加、法廷設備の完備とも相まって、裁判事務の円滑な遂行はもとより、訴訟関係者や一般市民の利便に資すること多大なものと見受けられるのであります。

私は、司法権の担い手である裁判所に対する国民の信頼に応え、法の支配と社会正義の実現に日夜努力を重ねておられる裁判官及び裁判所職員、更には検察審査員、調停委員その他の民間協力者の皆様が、この新しい庁舎で執務をはじめられることに心からお喜びを申し上げますとともに、旧庁舎が象徴していました名古屋の裁判所の長き、良き伝統を引きつがれつつ、他面、この新しい庁舎が社会に開かれた、しかも、新しい活力が満ちあふれる司法の殿堂となることを心からご期待申し上げます。

終りに、この立派な庁舎が完成するにいたしますまでの裁判所当局、地元関係者の皆様、その他物心両面にわたり多大のご協力、ご支援を惜しまれなかった、すべての方々の御労苦に対し、心からの敬意を表しまして私の祝辞といたします。

祝 辞

中部弁護士会連合会理事長 石 原 金 三

本日、名古屋高等裁判所をはじめとする裁判所合同庁舎の竣工式典にお招きを受け、中部弁護士会連合会を代表してお祝いの言葉を申し述べさせていただきますことは、まことに光栄に存じます。

承りますれば、東区主税町の旧裁判所庁舎は大正十二年に建設せられたことで、爾来、同庁舎は当中部地区における裁判、並びに司法行政の中心施設として、戦前戦後を通じ半世紀の永きにわたり、重要な役割を果たしてきたのでありますが、このたび老朽化のため改築されることとなり、ここにめでたく新裁判所庁舎の建設竣工をみたのであります。

新裁判所庁舎は、名古屋城郭内の風致地区内に建築されたため、公園の景観を配慮されて、多数の植樹による緑地帯に意をそそぎ、建物の容姿、色彩、周辺建物との隣接状況等、環境との調和はもとより関係者の使用の利便性に特段の工夫を凝らされたとうかがっており、近代建築の粋を集めた地下二階地上十二階、塔屋三階の赤煉瓦色の重厚にして壮大な真に中部圏管内を総轄する司法の殿堂たるにふさわしく、このたびの立派な竣工は、法曹の一翼を担う弁護士会といたしまして、まことに御同慶に堪えず衷心よりおよろこびお祝い申し上げますとともに、この建設にあたり多年にわたって幾多の困難を克服し、竣工を果された裁判所ご当局並びに建設関係者各位の御苦労に対して、深甚の敬意を表する次第であります。

ご高承のとおり、中部弁護士会連合会の中心的存在で、かつ、連合会の事務局が所在いたします名古屋弁護士会におきましても、裁判所庁舎の新築にともない、この新庁舎に隣接して新しい弁護士会館を建設し、時を同じくして過日開館披露を終えたところでありまして、ここに裁判所と弁護士会との緊密な連携の姿が実現されるに至ったのであります。

私共はこの機会に心を新たに、それぞれの分野における一段の努力と協調を通じて、国民の基本的人権を擁護し、社会正義の実現をはかり、もって司法にかける国民の期待に応えたいものと念願しております。

終りに新庁舎の恒久の安全と、ここにおいて執務される皆様方のご多幸をお祈り申し上げ、簡単ながら私の祝辞といたします。

祝 辞

愛知県知事

仲 谷 義 明

若人の衣替えが目にし、夏の訪れを感じるこのよき日に、名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所、名古屋簡易裁判所、名古屋第一、第二檢察審査会の合同庁舎の落成式が催されますことを、心からお祝い申し上げます。

こうして装いも新たな合同庁舎の一角に立ちますと、私はいま二つの思いにふけるのであります。

ひとつは、名古屋城を巡る外堀近くに位置する旧庁舎に寄せる思いであります。大正十二年に完工されましたあの建物は、当時としては極めてきつ新なものであり、重厚にして三層の赤レンガ造りは、その壮大さともになぞや多くの人々の目を見張らせたものでありましょう。

以来、半世紀余り、激変する時代の流れの中であって、幾多の風雪にも耐え、気品あるその姿は、そのまま、我が国の近代史の歩みでもありました。しかし、歳月の流れは、庁舎としては狭あい、加えて老朽甚だしいものとなり、新庁舎建設の必要に迫られたのであります。

いま、旧庁舎に限りない哀惜の念を禁じえないのは、ひとり私のみではありません。

いま、ひとつは、ここ名古屋城郭内に位置するこの近代的な新庁舎に寄せる思いであります。

今後、この新庁舎が法の正義の名のもと、当地方の中心的存在として未来に向って長く司法の府として、その崇高な使命を果されるものと存じます。

御承知のように、近年の産業経済社会の急激な変貌は、現代市民社会に大きな変革をもたらしています。こうした中であって、ときとして、個人の一身の自由、社会的身分、経済的利益など具体的事実について、衝突あるいは、紛争が起こることもありましよう。こうした事件に、公権的な判断を下される司法の府のもつ意義はまた大きなものがあります。

どうか、関係各位の御配慮よろしきを得て、多くの人々の信頼に応えられますよう願ひいたします。

終りにのぞみ、重ねて新庁舎の落成をお祝い申し上げ、御参集の皆様方の御健勝をお祈りして、お祝いのことばといたします。

祝 辞

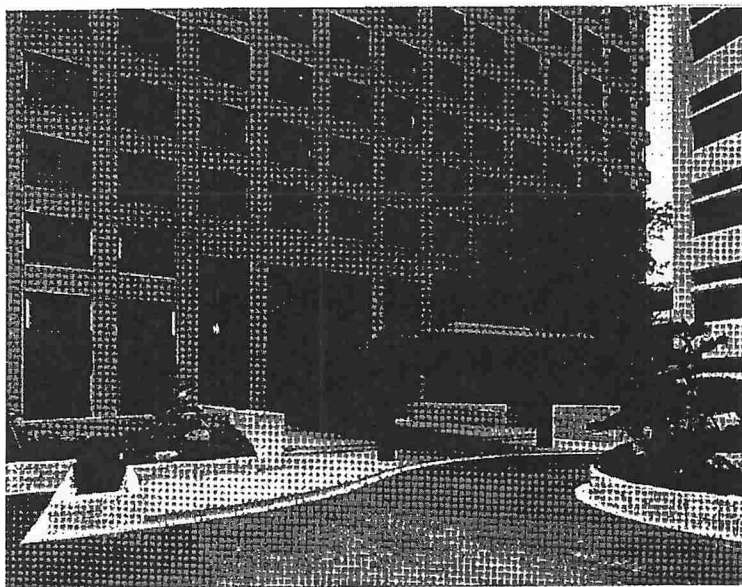
名古屋市長

本 山 政 雄

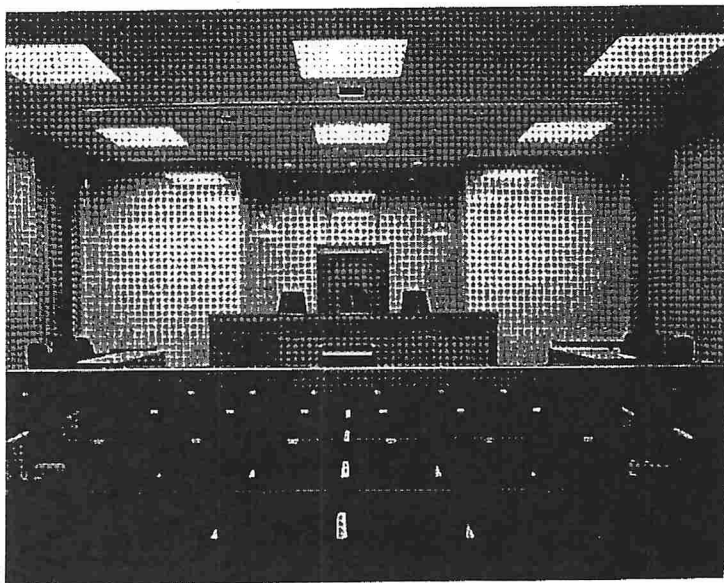
このたび、名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所、名古屋簡易裁判所並びに名古屋第一、第二檢察審査会の合同庁舎がめでたく完成し、本日、落成式を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

祝辞も、この予定表を見ますと、最後のようでございますし、後の披露宴で申し上げることもかもしれません、長官のごあいさつ、それから、もう一つは、前の長官であらせられ、現在、最高裁の判事をなさっております栗本判事さんのお顔を見まして、ちよつと、祝辞を堅苦しくしないで、柔らかくしてみたいという気持ちになりました。正式の祝辞を持って参っておりますが、最後でございますから、お許しをお願いいたします。

先日、皇室の方で、園遊会の催しがありまして、私もそれに参加いたしました。偶然、その席で、栗本判事さんにお目にかかりましたところ、私のことを覚えていてくださいます。『新庁舎の完成につきまして、ごやつかいになりました』という感謝のお言葉を承って、非常に、私、感激したんでございます。考えてみますと、私が市長に就任したその直後に、栗本前長官がおいでいただきました。新庁舎移転について、いろいろとお話がありました。さきほどの長官のあいさつにもございましたけれども、主として、あそこは公園になっておりますので、公園をつぶして、新庁舎を造るということには、かなり内部的にも反対がございました。当時の栗本長官は、非常に謙虚に、私に、『ぜひそのことに協力してほしい』というお言葉がありまして、私も若干は努力をいたしました。やはり、長官の御熱意が私を動かしたんだと思うのでございますが、いろいろな



北玄関

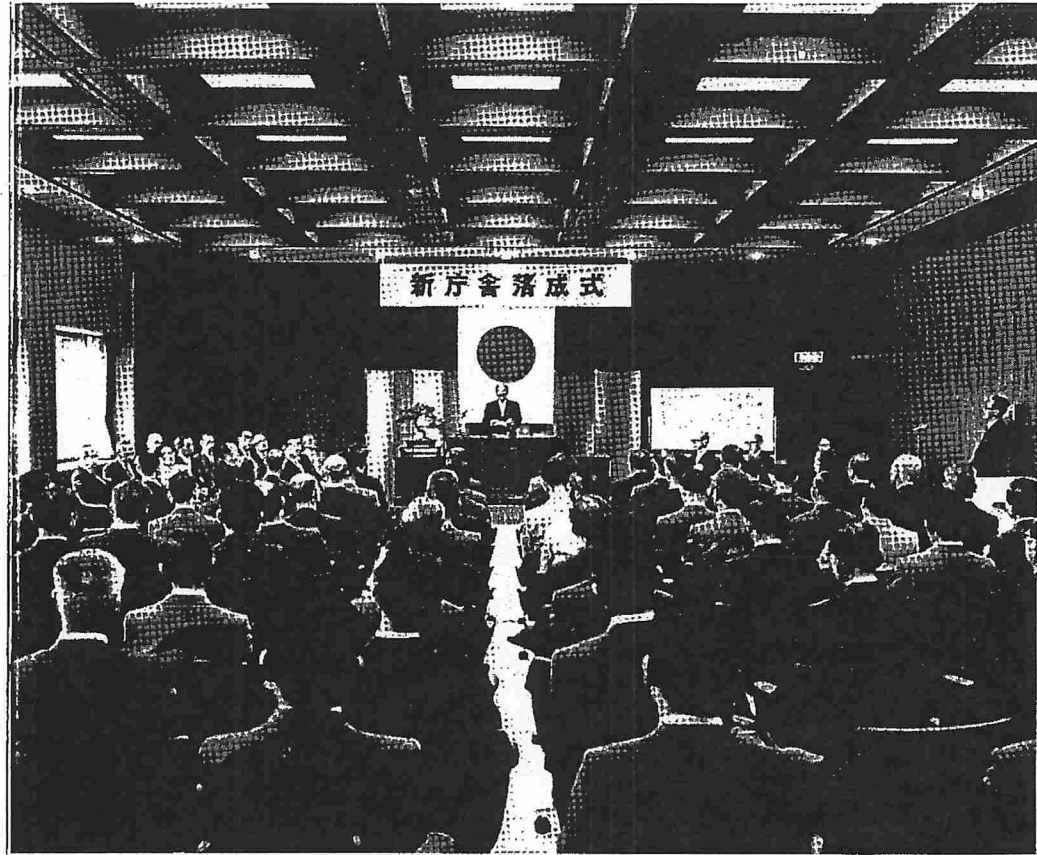


大合議法廷

反対をなだめました。それから、もう六年たつわけでございますが、その時、栗本長官にも申し上げたんですけれども、公園をつぶすから、なんとかして、緑いっぱいの新庁舎を造っていただきたいとか、ずいぶん失礼なことを申し上げました。結果的には、赤れんがの、さきほどからみなさんがおっしゃっておられますように、外観もすばらしい建物になりましたし、特に、一、二御指摘がありましたように、緑がいっぱいで、この付近にふさわしい、公園の中の新庁舎という感じになりました。このことを私も非常にうれしく思っております。いろいろかがっておりますと、外だけではなく、内部的にも非常にすばらしい機能を備えていることを承りました。私も、若十、この移転につきましては、関係いたしておりましたので、ほんとに心からお祝いを申し上げます。

さきほど、知事さんからお話がありました、旧庁舎につきましては、なんとかして国の文化財の指定を受けまして、名古屋の誇りの一つにするように、壊さないで、そのまま残しておくという方針で、今、一生懸命、関係当局に交渉をいたしております。私は、新庁舎とともに旧庁舎も名古屋の誇りにしていきたいと思っております。

大変粗辞を申し上げましたが、新庁舎の落成を心からお祝いを申し上げます、私の祝辞に替えさせていただきます。



大会議室（式典は6月2日）

名古屋裁判所庁舎

竣工に際して

栗本一夫

この度、名古屋裁判所庁舎が竣工した。まことに慶祝に堪えず、心から喜ばしいことと思う。

については、名古屋裁判所の職員としては、この建築の経費が国民の血税によって賄われていることに思を致し、国家、国民の期待を肝に銘じ、心を新たに、その職責に精進するよう心掛けるべきであると思う。

なお、私は、名古屋高裁長官として昭和四八年三月から同五一年五月まで、その地位にあったので、今回の庁舎竣工については、深い感慨なきをえないのであるが、私が最も苦労したのは、（今となっては、なつかしい思出ではあるが）敷地の獲得と庁舎の基本設計であった。

私が赴任した当時までは、前任者内藤頼博氏が敷地として名城東小公園に着目して、その獲得に鋭意努力を傾注しておられたが、種々の事由から、その実現は困難な状況にあった。そこで、私としては、最善の策がとりえなければ

改善の策として、名城西小公園敷地獲得に乗り出し、県知事、市長の御理解あるお計いもあって、それが実現したのである。

改めて、当時の桑原幹根知事、本山政雄市長その他関係庁の方々に深甚なる謝意を表する次第である。

庁舎設計については、中部地建の方々に非常なお世話願ったのであるが、基本的な設計、構造等については私も参画したので、その思出も深い。

大体において成功したと思っているが、果してそうかどうかは、今後、時が解決してくれると思う。

以上、求めに応じて一筆認めた次第であるが、重ねて名古屋裁判所職員各位の職務御精励と御健康をお祈りして筆をおくこととする。

（昭和五四・四・二六）

（最高裁判所判事・元名古屋高裁長官）

新庁舎落成にあたり

高 澤 新 七

私どもが久しく持ち望んでいた名古屋高等・地方・簡易裁判所合同新庁舎は、去る三月十五日巨額の国費と三年八か月の歳月をかけた多くの人々の英知と技術を集めた結果、見事に完成し、同日から執務に入っています。

大正期の洋風建造物の傑作の一つといわれている旧庁舎は、青いドームと煉瓦の色が美しい建物ですが、竣工以来五十五年を経て、さすがに老朽、狭あい化し、雨の日、バケツに落ちる音を聞きながら何回も聞いた新営工事に関する会議の様子もやがてなつかしい思い出になろうとしています。

新庁舎は、名城郭内という極めて自然環境に恵まれた位置に建ち、緑の樹々に囲まれて煉瓦調の壁面がユニークで重厚な光彩を放っております。

地下二階地上十二階に及ぶ鉄骨鉄筋コンクリート造りの庁舎は近代諸設備を完備し、旧庁舎時代常に不安を抱いていた地震等災害に対する安全性も十分に確保されています。

リット造りの庁舎は近代諸設備を完備し、旧庁舎時代常に不安を抱いていた地震等災害に対する安全性も十分に確保されています。

法廷棟、事務棟とも、機能性に富み、かつ気品と風格を備えており、まさに「法の城」と呼ぶにふさわしい庁舎になりました。

し、それぞれの職場でベストを尽くし、国民の信頼に応えたいものです。

屋上高く国旗がひるがえるこの庁舎は、私どもの日常執務する重要な職場であり、かつ、国民全体の貴重な財産でもあります。各種の設備の効率を維持増進させるため、専門職員を中心に日夜その点検整備に努めておりますが、なんとしても、この建物と設備を将来何十年にもわたって今と同じように美しく完全な姿で守っていききたいものであり、そのためには日常使用する全職員のものに対する深い愛情と心遣いが何よりも大切なことと思います。歴史的なこの落成に際し、幸いにもここに勤務し得た私たちはそれにふさわしい良い礎を築いてゆくではありませんか。

(名古屋地方裁判所長)

新庁舎に思う

三 和 田 大 士

われわれは、さきごろ、旧庁舎をあとにした。旧庁舎は古くはあっても風格がある。これを去るにあたって、しみじみ、その結構をかえりみ、創建当時の人々の苦勞や見識と、ここに職を奉じてきた先人達のことを、追懐したものである。

待望成った新庁舎は近代的建築のよさをそなえ堂々としていて、まことに、中京に位置する法衙たるに恥じない。あたかも、名城を背に、官公署区域に、重厚なすがたを見せ、この一廊にしみじみくちをつけている感がある。その外壁のレンガ色も周囲の緑に和し、今は植えたばかりの植込もやがて生長すれば一段の映えを見せることであろう。

この建物は、附近はもとより、かなり遠くからも望み見られ、いわば、これからの裁判所を代表することく、人々に大きな安らぎを与えることであろう。英国では、裁判所が教

会とともに市民の道標となつているときかされたことが思いあわされる。

内部は、大中小の法廷、会議室、裁判官室、事務室等、機能的で明るく眺望もきく多くの室と、これらに附属する近代的諸設備とが、ととのえられ、有難い執務環境をつくつてくれている。

かくて、まさに、新しい革装はできた。これからは、新しい芳醇な酒が盛られなければならない。そこには、悲喜交々の国民感情が浄化される雰囲気がある。それは、まさに、平和の殿堂である。そしてまた、広い意味で、眞摯な「たたかい」の場でもある。温にして厳。一度これに入れば、自然、襟を正す気持が醸される。これこそが、裁判所建築のあるべき特性を具現するものであろう。

また、思うに、裁判所ほど閑達な言論が行われ、公明正大さが要請されるところはない。

この、公正を主とする聖域は、みなで守りおせなければならぬ。建物内外の静謐は特に大切にしたいものである。

ちなみにいえば、裁判官は、職務柄、その行方と、ともとられるが、それだけに、つよく、自律が要請されることは当然である。さる人は、古く明治憲法下では、菊の御紋章が世上多分に影響をもつたが、今日では、法廷に臨む裁判官の赤襟々な挙措、活動、力量こそが、国民の矚目し、信頼を寄せるよりどころとなる旨、指摘される。それは、いわゆる弁護人抜き裁判の動きの中で裁判所側に対しても希望を披瀝される趣旨のものであるにせよ、われわれの胸をはたと打つものである。そして、このことは、職員一般にも、概して同様、いわれうところであり、この際おたがいの自省としたい。

ともあれ、この建物も、人の世の動き、各人の歴史とならんで、少なくとも半世紀位は生き、その間、多くの人々に愛され、また、これをばぐんでゆくことであろう。そして、いつの日までも憧憬をかりたててくれるであろう。ここに足入れしたわれわれは、けだし幸福である。永く生きよ、この新庁舎。それに入り来る後人のことを思うて、この稿をおわる。

(名古屋高等裁判事)

新庁舎の敷地

内 藤 頼 博

新庁舎の敷地の問題とは、私もずいぶん古い因縁がある。

たしか私が最高裁の事務次長をしていたときのことから、昭和三四―五年頃のことかと思う。名古屋の高裁の庁舎は、門前の道が狭くて、将来新庁舎を作るときは、あそこでは、困るという話で、新しい敷地の候補を見たことがある。そのとき見たのは、拘留所の東にある通産局跡地で、広い道路に面していることは申し分ないのであるが、敷地としては手狭な感じであった。

その後、一〇年を経て、昭和四五年、私は名古屋高裁に勤務することになった。その間に新しい庁舎の敷地がいろいろ検討されていて、私が着任した当時は、税務大学研修所が使っている敷地ではどうか、ということであった。その土地は城郭内にあって、地形も悪くない。ただ、何となく隅っここの感じで、裁判所の場所としては必ずしもよさわしいとはいえず、また、当時は、まだいつ空くのかも

判らないというような話であった。

裁判所の敷地にふさわしい土地はないかと、あれこれ考えてみたが、郭内ではすでに県警がで、中日新聞社もで、今では東小公園か西小公園の土地以外に適当なところはな。公園をつぶすということは、もちろん大へん困難なことに違いない。しかし、その困難を避けていたのでは何もできない。現在の裁判所の敷地を代替の公園敷地に提供することで、何とかならないものだろうか……。

とはいっても、着任して間もない私には、名古屋の事情は判らない。そこで、まず当時の弁護士会長の高橋正蔵さんに打ち明けた。実は裁判所の敷地に東小公園の土地がほしいと思うがどうでしょう。応援して頂きますか、と持ちかけた。高橋さんは、即座に、いいでしょう、応援しましょう、といわれた。私は、まさに百万の味方を得た感じがした。

早速、高橋会長と一しよに桑原県知事を訪ねた。桑原さんは、令兄の龍興氏が判事で、

私も若い頃お世話になった方。その令弟として裁判所に対してはかねがね深い理解を示されている。

「外国の都会では、どこでも一ばんいい場所に裁判所があると思います。」と切り出すと、桑原さんもよくご承知で、全くその通りだといわれる。それに力を得て、東小公園の土地を裁判所の敷地に、とお願いした。高橋さんの口添えもあって、桑原さんも、何とか考えようといって下さった。

次いで、杉戸市長。やはり高橋さんに同道を願って訪ねる。杉戸さんも、難かしいが何とか考えようと、好意的な返事をされた。当時の東海財務局長は辻敬一氏。辻さんは、早速訪ねてお力添えを願った。

高橋会長は、早速、弁護士会の中に野々たるメンバーの委員会を作られ、敷地獲得のための強力な陣容を固められた。

当時の最高裁は、事務総長が吉田豊君で、かつて経理局長として名古屋の高裁の敷地についてはかねがね心配していた人。また、経理局長の大内恒夫君。前の名古屋高裁事務局長で、名古屋の事情は知りつくしている。

地元と最高裁にこれだけの顔ぶれが揃っている以上、これなら何とかやれる。いや、この際にこそ何とかしなければならぬと、覚悟の程をきわめたのであった。

それからは、高裁事務局長の浅香恒久君、弁護士会長の高橋さんがそれぞれに中心となつて、建設省、県、市の各当局にあの手この手の攻撃をかけた。弁護士会の委員の方々も、それぞれに積極的に関与して下さった。

あれは、昭和四七年のことであつたらうか。憲法週間の視察に出られた最高裁の色川・岡原両裁判官が、たまたま名古屋で落ち合われることになった。この機嫌すべからずと、両裁判官の歓迎会に桑原知事と杉戸市長もお招きして、両裁判官から直接知事と市長に敷地のことをよく頼んで頂いた。これも大きな力になった。

その後、市長の改選があつて、市長が杉戸さんから本山さんにかわつた。そして、間もなく、昭和四八年三月に私は定年で退官し名古屋を去つた。これからはいよいよ難かしいという段階で、その仕事から離れるということである。もしこれが民間だったら到底許されることではあるまい。「役人」というものは全く不思議なものである。

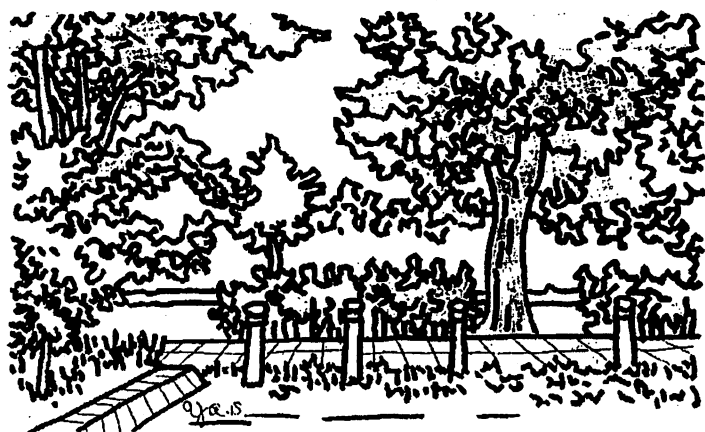
そのあと、後任の長官の栗本一夫君、そして、引き続き事務局長の職にあつた浅香君等が、西小公園の土地に敷地を獲得し、庁舎新営の緒をつけるに到るまでの努力は、どんなに大へんだったろう。その苦心はほんとうに並大抵のものではなかつたであらうと推察される。

幸いに本山新市長も裁判所の事情をよく理解して下さった。とくに、市の建設清掃部会で裁判所の敷地のために公園の移転問題が議せられたときには、自民・社会・民社・公明共産の五党全員の一致で可決されたとき、こんなに嬉しいことはない。司法のことは、まさにかくあらねばならない。これは、全く各方面で裁判所のために支援を惜しまれなかつた方々のお陰である。名古屋の新庁舎の礎石は、まさにこのとき、立派に築かれたのである。

いよいよ今日迎えた新しい庁舎の落成に、私も一しおの感慨を禁じ得ない。

お世話になった皆さま方、ほんとうに有難うございました。

(弁護士・元名古屋高裁長官)



井上正弘

委員会で初めに検討されたことは、庁舎の正面玄関を南にするか、北にするかであった。

次の問題は、事務室部分と法廷部分の配置について、第一点は、事務棟と法廷棟を各別個の建物にしてこれを渡り廊下で結ぶか、一個の建物内に収容するかであったが、これは簡単に後者に決定した。第二点は、両者を同一の建物に収容するにしても、その配置をどうするかであった。即ち法廷を上に、事務室を下にする（札幌方式）か、あるいは東西に分割する（大阪方式）かであつて、これは

然しの両案のいずれが真に妥当であるかは、容易に断定し難いところである。完成した現在の構造によると、事務棟の各階の面積が、法廷を全部上に上げた場合に比べて狭くなり（事務棟と法廷棟間の連絡通路部分の空白があるため）、その階でよくコンパクトに纏まって都合の良い部分が一方にあるが、他方にはエレベーターが階段で上下する必要がある部課がありはしないか。法廷も上下多階層に分散する等のため、部外者にとっては不便でもある。法廷を全部上に上げれば、法廷も事務室も関連部分が同一階層に纏まり、より広く利用できるが、エレベーターでは、常に職員（裁判官も含めて）と部外者が混在する可能性があつて余り好ましくない。

の多くははしくなかった。宮總関係者は市内の色の色にはしくなかった。白や灰白色は有りふれて興味がなく、年月の経過につれて汚れるが目立つようになる。委員会が種々意見交換の結果、旧庁舎の煉瓦色に近いものにしたいということに考えが一致した。

庁舎内事務室の間取りも事務の運営方法により影響される。そこで新庁舎に移るのを転

弁護士会館のタイルの色との関係は、結果的にはお互いに相手の色を引立てるような配合になって良かったと思う。建物ばかりでなく、その他でも、このようにありたいと願うのは、裁判官から弁護士になったばかりの私だけの気持ではないだろう。

は前記の大きな利点はあるが、簡裁は訟廷係を二分して民事係をセンターに入れ、民事係が刑事係より多いので訟廷管理官もセンターに移ることになり、この人達は地裁の訟廷課員、訟廷管理官と同居して、事実上は上級者の地裁の訟廷管理官の指揮下に入るようなことになって、仕事がいやいや辛くないか、残された訟廷刑事係の指導監督、簡裁全体としての指導監督等の処理に問題が残る、且つ、大阪の簡裁の訟廷管理官の経験談等も参考にして、遂にこの案に同意することができなかつた。然し研究すべき課題である。

庁舎内の各部屋の配置平面図は七回書きき

委員会のうちで、庁舎完成まで継続して委員をしていたのは、高毅事務局長加藤義則氏と私だけである。加藤氏が終りまで建設の中心であったことはその地位職責上当然のこととはいえ、その辛勞は恐らく筆舌に尽し難いものであり、その功績は大きい。私は新庁舎に移転する一ヶ月余前に退職した。庁舎完成時期が延びたためにその住人となることができなかったのである。

地下鉄市役所駅の南口を出ると、直ぐ裁判所が見えて、近いなあと思う。ところが歩くに従って段々遠ざかって行くのは不思議であ

る。裁判所まで約八分。その間の歩道の左の車道側には大きな並木がある。右側には公園があり、石垣に土盛りした芝生があって、そこに四月は桜、五月初めは「つつじ」の花が咲き、五月中、下旬には「うつき」の花の芳香が漂い、夏には「きょうちくとう」の花が咲く。通る車も少ない。名古屋市内の最も美しい歩道の一つで、ここを歩くのは楽しい。

新庁舎所感

伊藤 淳吉

新しい歩道の一つで、ここを歩くのは楽しい。キャッスルホテルからお濠端を歩いてくると、濠を前にした裁判所が見える。余り近寄らずに、弁護士会館の白い塔屋が樹間に隠れ、新庁舎の西壁に午後の陽光が当たっている情景は絵にしたい程である。裁判所は良い所に出来たと思う。(弁護士・前名古屋簡裁上席判事)

える。淡い茶色の高壮な建物が、緑の樹々と堀を距てて、緑育の名古屋城と向い合っており、その偉容を誇っている。見事な眺めである。新庁舎は、此の上ない好い環境の地に建てられ、場所柄も規模も、司法の殿堂として申分のないものである。

このような立派な庁舎が建てられるまでには、敷地の取得、建物の建築について、裁判所関係の多くの人々の非常な努力があったこと

とはいってもない。その中でも、私は、内藤判事高裁長官の卓抜な着想と不撓の熱意を憶わざるを得ない。

当初、新庁舎を建てるについての最大の問題は敷地の選定と獲得であった。現地に新庁舎を建てることは、建物の高さの制限その他の面に問題があつて、不適当であり、他に敷地を求めるとすれば、恰好な土地は城内であるが、城内も殆ど全部に官庁等が建てられてしまつてゐた。ただ僅かに、東西の両公園用地が保存されていて、若し城内で敷地を得ようとするならば、両公園用地の何れかの転用を図ることが、残されてゐた唯一の途であつた。そこでその取得のために関係官庁に意向を打診してみたのであるが、にべもなく断られて鉄壁の如きものであつたため、一時は断念せざるを得なかつた状態にあつたようである。

そのような時に、内藤長官が新に着任された。そして直ちに新庁舎の敷地問題に取り組み、諸般の事情を判断された結果、東公園用地を最適地としてその取得を決意された。国県市等の関係諸官庁との折衝を開始された。種々のルートを進められた外に、当時の桑原知事や杉市市長等にも何回となく直接会見して交渉に当たられた。私もそのうち何回か同伴をした。私は何の役にも立たず、ただ地裁所長という役目柄で随いて行つたに過ぎず、密

かに内藤長官の折衝振りに感嘆してゐたのである。勿論、当時の浅香高裁事務局長や島屋高裁会計課長はその下拵えや関係官庁の担当者等との交渉に頭を悩ませながら毎日奮闘してゐた。そのような努力を重ねるうちに、関係官庁も当方の熱意と真剣さに動かされて漸次此方へ向いてくれるようになり、事態は好転し、遂に西公園用地ならばというところまでになった。

しかし、内藤長官は飽くまでも東公園用地を目指して努力を重ねられていたが、その結果をみないうちに定年退官され、その後は栗本一夫長官が引継がれ、同長官の決断により西公園用地ということで落着いた。

内藤長官の執念ともいへば東公園用地は実現しなかつたが、西公園用地も面積がやや狭いというだけで、他の条件は全く同様の好適地である。このように西公園用地の取得できたのも東公園用地取得のための敷石があつたばかりといえる。私は新庁舎の偉容を仰ぎ見ながら内藤長官を憶う。

このようにして新庁舎は見事に出来上つた。直ぐに法廷も裁判官室も見えて貰つた。その立派さに目を見張る思いであつた。裁判官室は、**重厚な机と椅子**、やわらかい床とゆつたりと落ち着いたまことに結構な雰囲気である。隣りには別室もある。裁判官の執

務室として申分のないようにみえる。

ここで、私の経験した旧庁舎における裁判官室の模様を記載しておくのも一つの記録であらう。私が初めて名古屋地裁へ赴任して来たのは昭和十八年であつた。それから昭和四十八年までの長い間(その間短期間他へ転出したが)旧庁舎に蟠踞し続け、私の裁判官生活は旧庁舎で終結した。

戦前では、裁判官室も一部屋に一部屋といふような余裕はなく、二か部屋くらい宛つ同居し、それも月水金開廷組と火土日開廷組とが交替で使用した。裁判長は抽斗のある机を使用してゐたが、陪席判事は長方形のテーブルを一個充てがわれて、それを右と左から向い合つて共用してゐた。椅子は肘掛けのない木製の粗末なものであつた。テーブルには抽斗がないので、退庁時には毎回視箱や六法全書などの如き私物は一切部屋の隅に設置してあるボックス(現在、駅にある一時預けのボックスの如きもの)に藏つて帰つた。非開廷日に裁判所へ行つても、昨日自分が坐つてゐた席には他の組の裁判官が坐つてゐるので、自分の坐る場所もないという有様であつた。

戦後になつて、裁判官各自に専用の大きな机と肘掛椅子が与えられたが、部屋は机と椅子で一杯になつてしまひ、他に余りスペースもない窮屈な有様であつた。私は一部屋に三部も雑居してゐた地裁民事部の大部屋と称

する判事室に昭和三十九年まで六年間も坐つてゐた。裁判官だけでも大勢であるのに、司法修習生も数名同居しており、そのうえ、常に訴訟関係者が入り出し、傍らでは和解勧告をしてゐる裁判官もあつて、部屋中賑やかさを通り越して騒々しい極みであつた。しかしそんな中でも、それこそ口角沫を飛ばして何かとよく議論をした。隣りの部の議論にまでも口を出して法律を論じ、また雑談に花を咲かせた。生々として活気に溢れ、愉快な日々で、部屋の好くないことなどは一向苦にもならなかつた。

だが、それは一つの記録であつて、矢張裁判官室は新庁舎の如く結構であるのが望ましいことである。このような部屋で閑かに沈思し執務される現在の裁判官に羨望を感じざるを得ない。

ただ一つ、隙を得て窓を望むことが許されるならば、裁判は畢竟俗事の処理であり、裁判官も余りに自己の法域に立て籠つて閉鎖主義に陥つてしまふことは採らないところである。国民との触れ合い、裁判官同士のコミュニケーションにも心されることを希いたい。雑感なことを記しましたが、新庁舎の建築はそれに関係した者の一人として喜びに堪えません。落成を心からお祝ひいたします。

(弁護士・元名古屋地裁所長)

俯瞰五句

戸塚 笙子

(名古屋地裁判事)

桐の花も栄枯の翳り庁舎跡
名城の桜にいやす裁きかな
生涯を燃やす新屋や芽木の天
ここにしてみもの偲ぶ横樹若葉
控訴院跡をのぞめば風かおる



新庁舎の落成を聞知して

浅 香 恒 久

待望久しかった名古屋高等、地方、簡易裁判所合同庁舎が落成し、昭和五年三月一日、あの懐かしい赤レンガの旧庁舎から近代的な新庁舎への移転を終えたことを、当夜の電話で聞知した。昭和四五年四月から四年間、高裁事務局に勤務し、歴代長官のご指導のもとに、最高裁経理局と緊密な協議をなしつつ、新庁舎の敷地の選定獲得のため、会計課の職員とともに奔走して来た私は、深い感慨を覚えないではいられなかった。

思えば、庁舎の新営、その前提としての敷地の選定獲得は、当時の名古屋の裁判所にとって最大かつ緊急の課題であり、中部地方における司法の殿堂のあるべき場所としてふさわしいところにそれにふさわしい立派な庁舎を新営したい、というのが関係者の願いであった。現地改築にさまざまな難点があった

ところから、新敷地の選定獲得に力が注がれ、右の観点からまず着目したのが名城郭内東小公園であった。当然のことながら、裁判所の移転は、旧庁舎敷地内に会館を有する名古屋弁護士会をはじめとして、各方面に多大の影響を及ぼすことがあり、また、市が公園用地として園から無償貸与を受けていた東小公園の公園指定を解除して庁舎敷地とするためには、名古屋市、愛知県、東海財務局等の協力を得ることが不可欠であった。

そこで、まず裁判所の東小公園移転について弁護士会の賛同を得、次いで裁判所と弁護士会が一体となって、市に対し協力を要請した。長官と地裁所長が自ら出向いて直接知事、市長に要請したことも一再ではなく、私と会計課長が市、県、財務局の事務担当者のもとに足を運んで要請折衝した回数は、まさ

に「お百度参り」というにふさわしい程であった。県、市のトップ、特に知事は協力的であったが、担当者、特に市の担当者の意向は極めてきびしく、それには次のような背景なしい事情があった。すなわち、

第一に、戦後間もないころ市が名城郭内を官公庁施設の区域とする計画を立案し、裁判所に対しその区域内に移転するよう呼びかけたが、当時はまだ戦災で焼失した地の庁舎新営が急務とされ、名古屋の庁舎の新営は考慮されていなかったためか、右呼びかけに対し裁判所が消極的態度を示した経緯があった様子である。「裁判所は、誘った時には来ないで、今になって公園として残されているところに来たいというが、勝手過ぎるではないか」という言葉は、市の担当者から何回となく聞かされた誠に耳の痛い言葉であった。第二に、公園の廃止は、都市の公園緑地の整備拡充を目指す建設省の公園行政及び市の都市計画の理念に反するという事情があった。第三に、東小公園の廃止は、それを昼休みの運動の場に使っている周辺官庁街の職員の反対を惹起するおそれがあった。第四に、裁判所の移転について、裁判所周辺の住民から反対の声が挙がるおそれもあった。要するに、裁判所の移転問題は、市にとっては、得るところが少なく、これに着手すれば厄介な問題を背負うことになりかねない事業であったの

である。

右のような状況であったため、新敷地獲得運動は、難行を極めた。第一の従前の経緯については、平身低頭し、ひたすら現実の窮状を訴えて懇願するはかなかった。第二の点は、裁判所の希望ないし必要性と建設省の公園行政及び市の都市計画とが衝突する困難な問題であった。つまり、裁判所の立場からは、裁判所の庁舎を本来それがあるべき官庁街の中に新設することは、ひとり裁判所のためだけではなく、裁判所の利用者である市民、県民のために好ましく、また、市の都市計画を損なうものではない、と思われたが、建設省及び市の担当者の立場は、都市計画上の観点からして、公園の減少自体が好ましくないのみならず、官庁街の中に適正に配置した小公園、ことに利用者の多い東小公園を廃止することは極力避けたい、というものであり、右の立場にも合理性があつて、いわば正対正が激突する様相を呈し、その間の調整は困難を極めた。この問題は、地元だけでは解決できず、最高裁総務局と建設省との間でも折衝がなされ、事務総局の首脳が建設省の首脳と話し合う事態まで生じた。このようにして、各段階で各方面との折衝を重ね、東小公園を廃止して旧庁舎敷地を代替の公園とする方針が固まり、官庁街職員の屋の運動の場について代替の措置が検討され、昭和四十七年の終り

ころには、東小公園を廃止して新敷地となし得る見込みが生じ、昭和四十八年度に新設のための調査費が予算計上された。その後、名古屋市長の交替があり、そのころから前記第三の問題が表面化し、官庁街の職員組合の代表が裁判所に來て東小公園廃止に反対の意向を表明し、市議会においても裁判所の移転問題が取りあげられ、遂に市の首脳から、東小公園の廃止には応じ難いとの内意が示されるに至った。このことは、東小公園への移転を夢みて努力を傾注して來た私達にとつて大きな衝撃であつたが、新しい状況をふまえて検討した結果、見込みのなくなった東小公園に執着しないで西小公園に的を絞つて運動を推進する方針が確立された。そこで、再び弁護士会と交渉して西小公園への移転についてその賛同を得、改めて、長官と地裁所長が県、市に赴いて西小公園への移転を要請した。その後の折衝は、東小公園当時程困難ではなかったが、容易というには程遠い状況であつた。このようにして、漸く西小公園への移転につき市、県、財務局の了解が得られ、都市計画公園変更の原案が市の建設審議会に提出される運びとなつた。私達は、即日全員一致で了承されるものと期待していたが、前記第四の問題が生じ、市議会議員から市民の反対を理由に慎重論が唱えられ、右案件は継続審議となつた。そこで、弁

護士会と協力し、市議会各党に実情を説明して協力を要請するとともに、反対住民の集會に出席し、現地改築の困難なゆえを説明して反対運動の鎮静に努力した。その結果、案件は間もなく全員一致で了承され、市はこれを県に提出した。県での審議は順調で、速やかに知事決定の告示がなされ、昭和四十九年二月建設大臣の認可が降りた。新庁舎の敷地が西小公園に決まるまでの経緯の概要は、以上のとおりであつたが、それまでには、乏しい文才をもつては、到底表わし尽せない、実に数多くの方々の英知と努力が結果されたのであり、またその間、立場の相異から意見や利害の衝突を來して緊迫した局面が展開されたことも度々であつた。私は、昭和四十九年四月、転任のため名古屋を去つたが、この難事業に関与したことは忘れ難く、その後も折りにふれ、関係者の努力により新営のための設計計画、それに続く工事の施行が順調に進行していることを聞き、ひそかによろこんでいたのであつた。

すでに、新庁舎での執務が開始され、その評価も良好であることを知り、往時の関係者の一人としてよろこびに堪えない気持とお世話を抱き、新庁舎を見る日を楽しみにしながら、この拙文をつづつた次第である。

(東京高裁判事・元名古屋高裁事務局長)

外堀から丸の内へ

加藤 義 則

新庁舎がやっとできた。待ち望んでいた名古屋に新しい庁舎が……。

それは、けわしい山にくだり、疲労困憊の末山頂にたどりついたときの感慨、いや、それにまして、長い長い旅路の果てに、目的の地にたどりついたときの感慨にも似たものになるのでしょうか。そんな思いが脳裡をかすめます。

新庁舎は、昭和五〇年七月二六日着工し、昭和五四年六月二日の落成式まで約四年間を費やし、その間、関係者の多くの方々の心血を注ぐ努力によつて完成をみたものでありますが、現地新営と異なり、名古屋の場合、あたらしい庁舎敷地を他に求めざるをえなかったことから、敷地確保の段階で、関係者の方々が、庁舎建設にもまして、きびしい陣痛の苦しみに見舞われたことを、私共は忘れてはなりません。

それは、まさに、この時期になつて、名古屋の外堀から丸の内の城郭内に歩を進め、そこに居をかまようとする者にとって、宿

命ともいえる試練であり、賭にも似たものであつたと思われるのであります。今、名城郭内の新緑に映える新庁舎をみるにつけ、これまでの長い道のりでの出会つた、いろいろなできごと、そのさいの関係者の御苦勞を思い出し、感謝の念を禁じえません。以下、新庁舎建設までにたどつた道のりと新庁舎建設にあつた思い出深い点を書き綴つてみました。

新庁舎敷地の確保まで

新庁舎建設の計画は、時期としては、昭和三〇年代の終りに端を発し、その敷地について、通産局跡地(現現置所北東)、聖霊学園(現県警本部庁舎所在地)などが候補地として挙げられましたが、色々な条件が熟さないまま見送られ、自然消滅の形で推移しました。その後、昭和四三年になつて、裁判所側で候補地に選んだのが、名城東小公園でした。そのさい、候補地として、ほか挙げられたのが名城西小公園(現新庁舎敷地)、税務大学

研修所敷地などでした。当時の長官、所長、高裁事務局長は、名城東小公園について、精力的に、県、市、財務、建設の各当局と折衝されました。そのさい、裁判所が過去にとつた態度で非難をうけたのは「かつて戦後もない頃、名古屋市は、名城郭内に官庁街をつくる計画を立案し、裁判所にも移転するよう再三呼びかけたが、裁判所は誠意を示さなかつた。さつたときにこいで、今になつて公園として整備されたところに乗り入れるということは、あまりにも身勝手過ぎるではないか」ということでした。たしかに、当時は、名城郭内の官庁街もほぼ整備され、名古屋市内にある官庁は、ほとんど名城郭内に移転を終え、裁判所が移転するのは、最終列車に乗り込むことができるかどうか、の瀬戸きわに立たされた時点でありました。敷地確保についても、関係庁相互に利害得失が複雑にからみ合ひ、一進一退で、果たして敷地が確保できるかどうか、全く予断を許さない状況であつた、ときいておられます。この敷地確保のいきさつは、当時の関係者の方々が執筆されておりますので、そこに譲らせて頂きます。

今、ふり返つてみますと、その時代、すなわち、昭和四三年頃から四九年春までは、新庁舎建設のための適地をどこに求めるかで東奔西走し、さらに、立地条件として、外堀の旧庁舎より格段に恵まれた名城郭内に、歩を

進めるための基礎がためできた時期にあたり、私共は、当時の裁判所内部の関係者の御苦勞をしのび、関係各局の御理解と御支援について、あらためて感謝と敬意の念を抱かずにはおられません。

新庁舎建設にあたって

私は、昭和四十九年四月、名古屋高裁事務局に入り、前任者から事務の引継ぎをうけました。その当時の直面する問題は二点ありました。まず、西小公園（新庁舎敷地）について、国有財産東海地方審議会（以下国有審と略称）の承認を得て裁判所への所管換をうけること、つきに、庁舎新館の基本設計を早急に確立すること、がこれでありました。国有審については、その事前準備として、敷地に関するこれまでの集大成をすることが必要となりました。裁判所の現地新館の困難性、西小公園への移転の必要性、妥当性、弁護士会館併置の必要性、公園隣止に伴う代替公園用地の有無、裁判所跡地の利用計画、その他裁判所移転に伴ういろいろな問題が検討整備され、同年一二月の国有審で承認され、翌五〇年六月大蔵省から裁判所所管の行政財産として所管換をうけ、ここに新庁舎敷地所管換の最終手続は完結し、名城西小公園は、裁判所新館用地として、名実ともに裁判所のものになったわけです。これと平行して進められたのが、新庁舎

の基本設計でした。新庁舎は、設計監理が建設省中部地方建設局（以下中部地建と略称）に委任されておりましたので、裁判所は、ユザーとして中部地建に要望を提出する立場でいろいろなおつきあいが始まったわけです。要望を出す第一段階でまずとまどったのは、新庁舎敷地での建築について、いろいろな制約があることでした。建築基準法上の住居地域、防火地域にあたるのを手始めとして、都市計画法、名古屋市内風致地区内建築等規制条例による風致地区指定、特別の条件規制として名城郭内処理委員会の申し合わせ、などいろいろな規制があり、当時これではとても自由なびのびとした基本設計はむづかしいと危惧したものでした。建物の壁面線は敷地境界から一五メートル後退した地点に設け、それより前にも後にも動かせないこと、建ぺい率は風致地区指定の関係で三〇パーセントになり、敷地約九、九〇〇平方メートルに対し、裁判所はそのうち二五パーセント、弁護士会館は五パーセントにならざるをえないこと、都市計画公園（西小公園）を廃止したこと、及び名古屋城に直近の場所であることを考慮し、建物の外観、前庭、内庭を整備し、樹木造園については、特に考慮を払い、都市の美観、環境の保全に万全を期すること、など数えればきりのないほどの条件を基本設計におり込むことが要請されました。与えられた条件

のなかで、裁判所の機能と外観をどのように保持したらよいか、これをどのように中部地建に要望し、基本設計におり込んでもらうかなど高裁会計課を中心として、日夜多忙な毎日が続きました。裁判所内部の意見聴取及び調整の場として、新庁舎建設各庁間交渉委員会が設けられたのもその頃でありました。何回となく計画案の書きかえを重ねたうえ、昭和五〇年六月基本設計を確定し、同月郭内処理委員会で基本設計案の了承を得て、同年七月二六日着工式を挙行了、ここに工事の第一歩が踏みだされました。

基本設計について

新庁舎の敷地面積は、九、九一三平方メートル、庁舎延面積は三三、〇一〇平方メートル、構造は鉄筋コンクリート造、地下二階、地上一二階で、これを旧庁舎と比較すると、敷地は、約四割減、建物延面積は約二倍の広さになっております。旧庁舎とくらべ敷地が狭くなったことが、建ぺい率を始め、駐車場問題などに大きな影響を及ぼしたことは否めません。基本設計段階では、裁判所と弁護士会の建物をどのように配置するか、階高の異なる法廷ブロックと事務ブロックをどのように結びつけるか、事務ブロック内での高裁、地裁、簡裁の配置、裁判官室と書記官室等の配置をどのようにするか、職員、事件関係者

の動線処理をどうするか、など要するに、裁判所の機能と管理を物的な面で容易にし、同時にこれを名城郭内の特殊な立地条件に調和したエレベーションの建物にまとめ上げることが重点でした。そのさい参考とされたのが大阪、札幌の新庁舎でした。大阪方式は、建物の東西を三つに割り、南面（正面）を事務棟、中間をコア部分（洗面所、便所、階段等）、北面を法廷棟とし、建物正面からみて事務棟と法廷棟を前後に結びつける二棟案を採用し、札幌方式は一棟の建物の最上層部に法廷を、その下に事務室を置く一棟横割り方式を採用しております。階高の異なる事務棟と法廷棟を結びつける場合、その接点で階高を調整する必要があります。その調整面積が広ければ広いほど調整のための動線は複雑になります。また、法廷を最上層階に置くことは、階高調整の問題は起きないにしても、関係者は常にエレベーターを利用して上下動線を往復することになり、動線の集中化の問題と、法廷を最上層に持つことにより管理面で問題を抱えこむことになります。結局、名古屋の場合、それぞれの長所をとり入れながらも別の方式、すなわち、南面（正面）からみて、右の事務棟と左の法廷棟を中央部分でドッキングさせる二棟ジョイント方式を採用することによって階高調整面積を少なくし、職員は、原則として、右側の事務棟から左側の

法廷棟に移動する横動線 を主とするようにし、事件関係者は、法廷棟のエレベーターにより法廷に到達できる上下動線を主とするよう動線の二分化をはかり、また、機能、管理面から特に法廷を一階に設けることになりました。名古屋でこのような方式を採用できたのは、法廷の敷と事務室の敷のバランスがとれており、一二階の事務棟と九階の法廷棟が、四五メートルの高さで一致し、一棟の建物としてコンパクトにまとめられたことが幸いしたといえましょう。この点は、新庁舎に移り住んでみて、名古屋方式が他庁と比較して、決して悪くなかったことを実感し、自画自賛しているところでもあります。その他、裁判官室と書記官室等の配置を原則として にしたと、職員と事件関係者の動線との分離をはかったこと、管理、防災面から動線の一時的遮断をはかったこと、などは名古屋だけでなく、最近の裁判所新館で採用されているところですが、今後の新館計画にあたっては踏襲するべき点のように思われます。なお、法廷の構造については一言ふれておきたいと思えます。新庁舎では法廷が無窓となっておりませんが、これは、安全性確保のための構造設計の一つとして、耐震性を持たせるため、窓のない耐震壁を設けることが必要とされ、これと の開設、法廷の配列の問題をからめて検討され、

法廷と との間に耐震壁が設けられたもので、やむをえないことといえましょう。これは、名古屋特有のものでなく、大阪、仙台等最近の裁判所の高層建築では宿命ともいえるもののようにです。

外壁構成 (ELEVATION) 色ぎめについて

新庁舎について、裁判所側の要望を出すさい、最後まで確信が持てず、今でもこれよかったかどうか、ふっと思い返すものに、新庁舎の外壁構成とその色ぎめの問題があります。裁判所の建物を考える場合、それによさしい重厚さ、気品、風格といったものが必要になります。重厚さを出す点からいえば、外壁構成について、各階に庇を突出させ、横の線を強調し、深みを出すことが考えられます。近頃の名古屋法務合同庁舎は、庇を二メートル以上も突出させ、その重厚さを出しているよい例といえましょう。しかし、この案を採用できなかったのは、前に述べた建ぺい率の問題がからみます。名古屋の場合、裁判所と弁護士会館とを合わせた建築面積は、建ぺい率三〇パーセントぎりぎりであり、これ以上庇を突出させようすれば、逆に建物の外壁線をそれだけ内側にバックさせることを余儀なくされます。事務室を広くとることを最優先としてきた建前から、これは到底耐え

られるものではありません。そのほかにも、縦の外壁幅を広くし、これを強調しようとする案、法廷棟の外壁は全く窓を設けず、外壁でぬりつぶす案などいろいろな試案ができましたが検討の結果、現在採用されている格子模様のエレベーションにきまりました。

また、外壁の色きめについても、名城郭内の立地条件と格子模様の外壁構成を前提として、白色系、白みかげ調、煉瓦調の三案が中部地建から出されました。白色系、白みかげ調は、建物にマッチし、清々感を与え、重厚さと風格の面でやや難点があり、煉瓦調は、選定を誤ると失敗作になりかねないが、成功すれば重厚で風格のあるものになる、というのが地建側の説明でした。裁判所側からどのような意見を出すかについて、かなり長い期間、職員の方々から意見をきき、また名古屋管内の主な建物めぐりもしました。職員の意見は、必ずしも多くありませんでしたが愛知県議会議事堂の外壁タイルが候補として二、三出されておりました。また市内をみて気がついたのは、大体白系統の建物が多いこととありました。しかも一〇年前後経年したと思われる建物については、建物が白系統であるため、よごれがめだち、雨落ちのあとには殊にひどい変色がみられました。このような実態からして、色彩の持続性、耐久性を充分考慮する必要を痛感した次第です。この点に

ついて地建側の意見をきいた結果、色の持続性、耐久性については、煉瓦調が最も優れておる、とのことであり、名城郭内に緑に恵まれる点を考慮すると、煉瓦調の線で行くのが妥当のように思われました。結局、裁判所内部で最終的な検討を加え、色は、煉瓦調として、その中でどのようなものが最も適するかを地建の方にお願ひすることとし、地建側で慎重な検討、試験焼をされたうえ、現在の煉瓦調タイルが確定案として浮上したわけでありました。

およそ建物の建築を考える場合、従来のものになかった獨創性、新規性をこれに採り入れた、と願うのは、たんに技術者のみならず、誰しもが一度は考えることかもしれません。しかしこれは他面大きな冒険でもあります。一時的に人目をひいても、時の経過にともなうて、うたかたのように見捨てられ、見向きもされないようでは失敗といえましょう。今後四〇年、五〇年の風雪に耐えるためには時代を超えた美しさと風格を残したいものです。このような願ひが、果たして新庁舎で具現できたかどうか、は今後の批判にまつことにして。

外構工事について

新庁舎敷地は、名古屋城直近の場所に位置し、名城郭内でも最も恵まれた環境にあります。

新庁舎落成に思う

鳥居 賢

の折衝でありました。

名古屋高等・地方・簡易裁判所職員の待望久しかった合同庁舎が昭和五十四年二月竣工し、同年三月その外壁に大正の残光をとどめる赤煉瓦の旧庁舎から近代的な新庁舎に移転されましたことは、御同慶にたえず、心からお喜び申し上げます。

思えば昭和四十三年から約七年間、高裁事務局会計課に勤務し、その間長官および事務局員並びに、最高裁経理局の皆様との確かな御指示ないし御指導を受けて、新庁舎敷地確保に参画した私にとって、今、気品と風格に満ちた新庁舎の姿を目のあたりにするとき、これまでの道程が長く険しかっただけに、感慨ひとしおのものがあります。

当時の敷地確保の経過は、当時事務局長であった浅香判事から詳細にわたり御説明があらまですので、私が格別取り立てて、申し上げることもありませんが、当時を振り返るたび思い出されることは、新庁舎敷地確保のため、市・県・財務局の関係者の方々に対して

す。公園の一郭に位置するだけに、建物、樹木造園については、当然のことながら、これら周辺の環境との調和について最重点を置くことが要求されました。庁舎外構の緑化については、名古屋市中からも強い要望が出されました。地建、裁判所側としても、この点に最大限の配慮をしました。特に名古屋城に面した北側植栽に意を払い、これと煉瓦調タイルとのコントラストをねらった地建側の外構計画は、周囲の環境と調和し、ほかの官庁にはみられない風格と重厚さをも出し出しており、初めて本来の味わいを生み出すことを、つくづく感じたことでした。

おわりに

裁判所新庁舎と新弁護士会館を建設することは、名古屋の法曹にとって、ここ一〇数年来の夢でありました。ここに裁判所新庁舎と新弁護士会館が落成することによって、永年の夢が実現しました。私共は、この間実に多くの関係者の方々が、この建設のため努力を結集されたことに深く感謝し、名城郭内の緑に囲まれて屹立する新庁舎をまもり育て、後世に引継いで行く責任をあらためて痛感する次第です。

(名古屋高裁判事・前高裁事務局長)

局のもつ感情的なわだかまりを取り除くため市の担当者のごとくへ日参し、情報の収集やら、人間関係の調整に努めました。

ともかく、裁判所には相手方がプラスになるような見返りの条件があるわけでなく、ただ、ひたすら、庁舎新営の必要性と、現実の窮状を訴えて懇願に努めるはかなかったのですが、ようやくその効果があらわれ、市は、裁判所の立場を理解し関係機関との意見調整に努めようというところまで来ましたときの私どもの喜びは、筆舌には尽くしがたいものでした。

ところが、東小公園周辺の官公庁の労組から「貴重な憩いの場所がなくなる。」として強い反対があり、また裁判所周辺の住民から移転反対運動が起きるなど難関が次々と出てきました。住民の反対運動については、学区別の反対住民集会に出席し、事務局長とともに市の担当者を加え、夜遅くまで現地改革が極めて困難であることの説明に努めた結果、ようやく賛成を得られたのですが、労組の反対運動については、市長の交番もあって納得を得ることができず、東小公園敷地の確保は遂に涙を飲まざるを得なかったのです。そこで、「東小公園がだめなら西小公園がある。」と的を西小公園に絞り、東小公園敷地確保のため経験した誠意と懇願に自信を以て、裁判所、弁護士会が一体となって敷地確保に努力した

結果、ようやく西小公園を敷地として確保することができたのですが、東小公園までの難かしきなかつたものの、決して平坦な道程ではありませんでした。

昭和五十七年七月二十六日に新庁舎の工事安全祈願祭が挙行され、新宮の雄音が官庁街に響きわたったときには、私の三十数年の裁判所の勤務で一番爽りのあった仕事やれたと心から喜んだのですが、今新庁舎を目の前

新庁舎の

工事経過報告について

足立登

「赤レンガに緑青のドーム」ルネッサンス風の独特の風格をもつ旧庁舎は、大正十一年名古屋市中区主税町に建築されて以来、五十年の歳月を経て近年老朽化がいくじろしく、雨もりや耐震的にも問題が生じ、かつ事務量の増大による狭いもあつて、昭和四十八年に新庁舎を建設することが決まりました。

ところが現在地は、木造民家の密集する住居地域で高層庁舎を建築する場合は、日照、電波障害をひき起こすおそれがあり、また周辺道路の幅員が狭いことなど環境条件も適しておらず、また工事期間中の仮庁舎の確保が極めて困難な実情から、それにふさわしい場所が要求され、別地に適地を選定する必要があり

ました。そこで、敷地確保については、紆余曲折はあったが関係機関の協力を得て、昭和五十七年六月、名城西小公園に最終決定し、このたびその跡地（名古屋市中区三の丸一丁目四番一号。九、九一三、四一）に堂々たる威容と重厚さを誇る新庁舎が誕生しました。この敷地は、名古屋城郭内にあり、風致地区であることはもちろん、城郭内全部が公園という名古屋市内でも有数の恵まれた環境にあるため、建物、樹木、外構等について周囲との調和が要求されるのです。

ところで、新庁舎を名城西小公園に建てるかわりに旧庁舎は取りこわして、跡地を都市公園にすることが昭和五十七年六月に、名古屋市中、財務局、裁判所の三者で確認されていますが、その後、市民から名城の外郭にあつて市内でも数少ないレンガの組積造りの洋風建物をこわしてしまうのは残念だという声があつてきて、目下各界で保存問題が論議されているところでもあります。

工事経過について

庁舎の規模

鉄筋コンクリート造地下二階地上十二階

塔屋三階

建築面積 二、五四二㎡

延面積 三三、〇一〇㎡

軒高 四四・九五m

最高高さ 五四・四五m

外装 PC版三丁掛タイル打込み

(地下車庫) 鉄筋コンクリート造地下一階 二、一五六㎡

施工業者

建築工事 戸田、六合建設共同企業体

電力工事 日本電設工業株式会社

通信工事 千歳電気工業株式会社

衛生工事 川崎設備工業株式会社

空調工事 新菱冷熱工業株式会社

受変電工事 株式会社高岳製作所

エレベーター工事 株式会社日立製作所

三菱電機株式会社

植栽工事 岩間造園株式会社

この総工事費は、七十一億余円であり、かねて、名古屋城郭内に敷地を確保することを前提として、名古屋高等、地方、簡易裁判所合同庁舎を新築するとの基本構想のもとに、中部地方建設局で設計の検討が進められていて、昭和五十七年六月に名古屋高、地、簡裁合同庁舎新築基本設計が確定したのであり

ます。ところで、前述したように名古屋城郭内という特殊地域のため条件規制があり、特に、東海財務局、中部地方建設局、愛知県、名古屋市の四者で構成する郭内処理委員会、官公衙地区内の建築についての制限が設けられています。その内容は、この地区は名古屋市の官公衙地区となつて政治、文化の中心となる地区であるので、全域にわたつて、それにふさわしい環境の保全、育成に万全の努力を払わねばならない。また、建築物の外観、前庭はもちろん、内庭も常に整備して都市の美観、特に、公園的雰囲気醸成に各占有者が格段の尽力を傾けねばならないとして、次のように具体的事項が列記されています。

- 1 都市計画法による制限
風致地区である……名古屋風致地区内建築等規制条例によつて市長の許可を必要とする。
 - 2 建築基準法による制限
イ 住居地域である……高度制限二〇m 但し二〇m以上は許可を受けること。
ロ 防火地域である……主要構造部、外壁は耐火構造であること。
 - 3 郭内処理委員会の申合せによる制限
イ 設計については事前に県、市に協議のうえ、了解を得ること。
 - ロ 壁面線は敷地境界線から一五m後退し、この間に内庭をつくること(五mのグリーンベルト)。
但し玄関に限り突出部をつくることができる。この場合でも壁面線から八mをこえてはならない。
 - ハ 内庭(建築物に囲まれた内側の庭)については特別の規定はないができるだけ多くの空地を残し、またこの空地は努めて緑化せねばならない。
 - ニ 建築物の高さは五〇m、幹線道路に沿う地区は四階以上、その他は三階以上とすること。
 - ホ 電線等はすべて「地下埋設」とすること。
 - ヘ 敷地境等には囲増の類は設けてはならない。
 - ト 倉庫、ガレージ等の附属建物は本館と一体をなしてその外観も同一意匠であること。
 - チ ガレージ等は街路に曝露する位置に設けてはならない。
 - リ 周囲のグリーンは石垣とか造園で囲障すること。
- 以上のような厳しい建築上の条件及び制約を受けながら、裁判所という極めて社会的に重要な役割を果たす建物であるから、その機能を十分発揮できるよう安全性を確保して、

構造面にも格別配慮した基本設計がなされています。

◎ 設計計画の概要

庁舎は、地下二階、地上十二階の規模でコンバクトにまとめ、南前面道路に面して配置し、北側には四十五台収容の駐車場、弁護士会館ならびに七十一台収容の地下駐車場が計画されました。

敷地内の空地は、郭内にあることから極力植樹により名城の風致にマッチさせるよう努められています。

正面玄関中央に三階吹抜きのホールを設け、中央ホールの左（西側）が法廷棟右（東側）が事務棟で天井の高い法廷と普通の高さの事務室が同居するため、外観は十二階建てだが法廷棟は九階分になっています。

中央ホールに、法廷棟専用エレベーター二基、事務棟専用エレベーター三基を配置し、法廷棟の一階に大合議法廷二室、四・七階に単独法廷二十四室、九・十一階に合議法廷十一室の総計三十七室があります。事務棟の一階に受付センター、経理関係室、二・三階に調停関係室、四・十一階に書記官室等の事務室を計画し、最上階の十二階に大会議室、診療室、電話交換室等があり、階層下から簡裁、地裁、高裁の順に配置してあります。

裁判所は、裁判官と被告人、当事者、傍聴人等の動線の明快な分離が強く要求されることから、**■**の適切な配置について特別の配慮がなされています。

構造面では、災害その他の外力に対して、十分な安全性を確保するため、適切な震度の割増しを行い、地震時における「むちより現象」を少なくするため上層部を補強する。床板は軽量コンクリートを使用し、軽量化を図る。柱はSRC造（鉄骨鉄筋コンクリート造）とし、柱の許容軸耐力を大きくする等に留意されており、また、外壁面は、柱、梁に窓といった構成で、一般的な壁に窓といった感覚でないこと。色調は、従来の赤レンガ調的な感覚を保持しつつ重厚さと気品、風格を出すため茶系統の煉瓦調を選定し、材質は、せつ器質として焼物の材質感を極力出すために釉薬で色を出すのではなく、生地そのものの色と窯変による色むらを出す等の設計であって、基本的構想として名古屋城郭としての調和と親しみ易い明るいイメージに、防災と身障者対策が重点課題であるとの認識のもとに細心の設計がなされています。この点は、設計監理者である中部地建担当の御苦心と御努力と英知の結果を十分窺い知ることができます。

◎ 工事の進行状況

昭和五十年一月～三月に敷地地盤調査工事

十二年十二月二十五日、工事内容は、空気調和設備、換気設備、排煙設備工事。
建築（三回）工事は、昭和五十二年九月、発注、工期を昭和五十四年二月十五日、工事内容は、外壁タイル張プレコン残工事、内部仕上工事、表示板類取付工事。
衛生、通信、電力、空調等第二回各工事は昭和五十二年十二月に、第三回各工事は昭和五十二年三月に、それぞれ前年度の継続工事として発注。

エレベーター工事は、昭和五十二年三月、株式会社日立製作所及び三菱電機株式会社に発注。

受変電工事は、昭和五十二年三月、株式会社高岳製作所に発注。

建築（四回）工事は、昭和五十二年三月に発注、工期を昭和五十四年二月十五日、工事内容は、地下車庫、運転手控室等全工事。

建築（五回）工事は、昭和五十二年九月に発注、工期を昭和五十四年三月十五日、工事内容は、地上駐車場、外構全工事。
通信、電力等第四回各工事は昭和五十二年九月、継続工事として発注。

植栽工事は、昭和五十二年十一月、岩間造園株式会社発注、工期を昭和五十四年三月十五日、工事内容は、植栽、庭石等全工事。
当初の計画では、昭和五十二年に新庁舎を竣工し、昭和五十二年に旧庁舎の取りこ

が進められ、昭和五十二年六月三十日に建築第一回工事として指名競争入札の結果、戸田、六合建設株式会社の共同企業体に発注することになり、同年七月二十六日安全祈願祭を行って、工事は本格的に開始されました。

建築（一回）工事は、昭和五十二年五月十五日までに鉄骨六階までの組立てと七階十階までの一部工場製作及び地階二階一階地上一階までのコンクリート打設工事。

建築（二回）工事は、昭和五十二年六月に発注し、昭和五十二年九月末までに七階一十階の鉄骨組立て、二階一十二階までのコンクリート打設、外壁PC版打込み工事。

衛生（一回）工事は、昭和五十二年六月、川崎設備工業株式会社に発注、工期を昭和五十二年十二月二十五日、工事内容は、衛生器具、屋内給排水消防設備給湯ガス設備工事。
通信（一回）工事は、昭和五十二年六月、千歳電気工業株式会社に発注、工期を昭和五十二年三月十五日、工事内容は、電話配線、電気時計振動設備、表示設備、インターホン共聴設備工事。

電力（一回）工事は、昭和五十二年六月、日本電設工業株式会社に発注、工期を昭和五十二年三月十五日、工事内容は、電灯、動力設備工事。

空調（一回）工事は、昭和五十二年六月、新設冷熱工業株式会社に発注、工期を昭和五

事内容、日程等につき、関係者が十分協議をつくして検討を重ねてきましたが、その都度中部地建担当は、各業者を説得して、地元裁判所の意向を反映させ、要求実現に努力されたことに対し、深く敬意を表するものです。

ところで、中部地建担当から予定どおり、昭和五十四年二月十五日庁舎の竣工に伴い、引渡期日を同年二月二十日、完成検査日を同年二月十四日～二十日とするとして、完成検査に立会方の要請を受けました。そこで、旧庁舎から新庁舎へ移転作業に入るわけであるが、裁判を中断させないようにスムーズに移転させるため、この間、公判事務などは新、旧庁舎で行うことにし、移転作業を三月一日から十五日までに完了する目途が立てられました。

会計課としては、移転日程の決定により、それまでに完了しなければならぬ作業として、庁舎の引渡しを受ける二月二十日から移転作業開始日の三月一日までの間に、各業者から新規購入備品を新庁舎に搬入してもらい、レイアウトのとおり配置を完了した各部課室から電話機の取付けを終了する。これは、引越作業中に合せて実施すると、かえって作業が混乱するおそれがあるので、八日間という短期日ではあるが関係業者の協力を得て、一挙に作業を完了すべく連日打合せを重ねて、万全の計画のもとに、関係業者及び各職場の

協力を得べく奔走するとともに、引越業者とは最終的な移転作業の打合せを行いました。なにしろ経験のないことで、当初から最も心配されていた移転作業も三月一日から始められたが、意外に作業は順調に進み、日程どおり三月十五日無事に完了して、一同はつと安堵しました。幸い引越期間は天候にも恵まれて、連日残業あるいは休日返上の強行スケジュールであったにもかかわらず、身体的に一人の落伍者もなく、この大事業を終えたことは、何よりの喜びであったとしみじみ満足感を味わい感謝しています。

こうして、多年、願望であった近代ビルの

新庁舎の落成によせて

新庁舎で、お互いに、慰労のビールを口にしたら、今度は、目標実現のため、これまで双肩にかかっていた重荷が一度に降ろされたような虚脱感を覚え、感無量の思いでした。しかし、新庁舎完成の喜びの反面、諸設備が高度に機械化されているので、庁舎の維持管理については、旧庁舎当時、想像もしなかったような複雑困難な多くの問題が内在しており、設備、衛生、保安、保全等庁舎の総合的な管理態勢の必要と併せて、省エネルギーを叫ばれているとき、どのような運営をなすべきか、今後の課題として痛感しているわけです。

(名古屋高裁会計課長)

一角に旧庁舎の煉瓦のイメージを取り入れ、

「尾張名古屋は城でもつ」その名古屋城三の丸跡、名城西小公園に名古屋高等・地方・簡易裁判所新庁舎建設のため公園を一巡しましたのが、昭和五十年六月末でした。そして満三年九月、この新庁舎を無事完成させることが出来ました。

戦後、官庁街と変貌した城郭内、三の丸の

囲の縁と調和した近代建築の格調高い新庁舎の落成に際し、工事関係者一同心からお慶び申し上げると共に、これも偏に施主であります名古屋高等・地方・簡易裁判所、設計監理をされた建設省、中部地方建設局管轄部、関係各位のご指導、暖かいご支援の賜と深く感謝いたします。

謝申し上げる次第であります。

此の度、工事担当者として施工中の苦心談についてのお話でございますが、地下工事当時の早朝五時半出勤、六時よりのコンクリート打設、躯体工事の労働者不足による残業、深夜に至る鉄筋組立作業等、いろいろと味わった苦勞の数々も私共技術屋と申しますか現場員は当然の事と消え失せて、春秋二回社員全員で投票に依り、行先をきめるドライブ民泊一泊旅行等、楽しかった思い出の方が想起されます。

さて、工事についてですが、当工事は戸田建設、六合建設との共同企業体で建築工事の施工に当たったわけですが、当初、その組織作りを充分検討しました。

自社の社員は特技其の他が判っていますが、他社より出向して来た社員については不明です。その作業分担について差別のない様、又各人が持味、特技を最大限に発揮出来る様にトータルをなくしチームワークよく、長期間の工事に対処出来る様、各人の意見を取り入れ編成したわけです。

幸にも社員間のトラブル、労働者とのトラブルは一度もなく竣工まで参りました。

次に、施工管理についてですが、当工事は一期工事より継続五期工事でありました。

一期工事は、地下工事と地上三階までの鉄骨工事、二期工事は地上の躯体工事、三期工

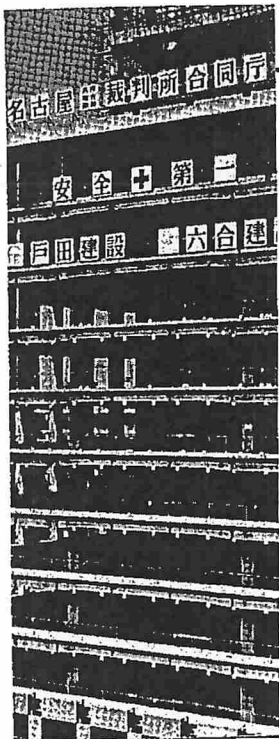
事は、全館仕上工事、四期工事として別棟に地下駐車場と東西運転手控室、五期工事として外構工事と年度予算による発注形態で仕事をしました。

作業所として、工事の管理指針を全工期を通じて綿密なる施工計画にて、手戻り作業の皆無、躯体工事中は、精度の向上、仕上工事中は、品質の向上を加え管理して参りました。

日本全国どの土地でもお城のある所は地盤の良い所とされて居ります。地下工事を施工しても涌水は無く、地下十二メートル六五センチ掘ったわけですが、完全ドライワークが出来ました。

躯体工事につきましては、鉄骨工事の精度ですが、地上五十五メートルにてプラスマイナス一〇ミリ以内で納めました。

外装はせっき質タイル打込PC版カーテン



ウォールでしたが、先づ色合わせを充分留意、製品を検査し、寸法誤差基準をプラスマイナス三ミリとし、取付時のトラブルを少なくし取付後のチェックは、プラスマイナス五ミリを基準とし施工しました。

次に安全管理についてですが、当作業所内に別途発注設備業者を含めた安全協議会組織を編成し、この規則に従って安全管理を実施運営しました。

全工事を通じ、いかにしたら怪我人を出さないですむか、重大災害は絶対に起さない、それに対処するには、何れも作業環境の整備に心掛ける、毎日八時よりの全員朝礼の時当日の工程と同時に、危険作業は何をするか全員に周知徹底させる。「安全ミーティング」、この二点の繰り返しをして工事を進めました。

現場は生き物のように動いている。工事の

進捗により作業内容、環境が変って行きます。実際に即した安全目標を決め全員で着実に実行し、毎日積み上げて行くべきだと、この安全活動が作業員全員に浸透し、好結果に繋がったと確信致します。

当工事を完成するまでに、延社員教九、〇〇〇人、延労働者数一〇九、二五〇人、延労働時間九四六、〇〇〇時間費しました。

振り返ってみますと長期間工事には色々な問題点、苦しかった事もあります。請負業者に入社し、二十五年目にして長期で大型のこの名古屋高等・地方・簡易裁判所の建設にたずさわる事が出来たことを光栄に思っています。私として忘れてはならない出来事な建物でございます。

「ルネッサンス様式を基準として近世様式を加味した軽浮に流れず壮嚴を旨とせり」と設計主旨でいわれた、大正時代に建設された旧庁舎、いかめしさを取り除いた親しみやすい近代建築のこの名古屋高等・地方・簡易裁判所合同庁舎が、名実共に立派な司法の殿堂であります様祈念いたします。

最後に、当工事にご協力いただいた関係各方面の皆様方、協力業者各位に心からお礼を申し上げます。

主税町から三の丸に

移転雑感

柴田 菊二郎

建設省中部地方建設局管轄部の設計、工事監理によって、名古屋高等、地方、簡易裁判所の新庁舎が名城郭内三の丸に竣工した。

その煉瓦造りが竣工したとき、多くの人々を目を見はったことだろう。そして東外堀町から主税町にかけて道路拡幅がなされたとき、主税町は新しい時代を迎えた。

鉄骨鉄筋コンクリート造、地下二階、地上十二階、三階建塔屋付
建築面積 二、五八八・三平方メートル
延面積 三三、〇一〇・二平方メートル
底面積 一三六・三平方メートル
車庫等（運転手控室、一部機械室共）
延面積 二、三二七・五平方メートル
総工事費 七億四、八八九万円余
軒高四四・五メートルのレンガ調タイルを張った堂々たる偉容は、主税町のあの煉瓦造三階建と比べると、時代の流れをひしひしと感じさせる。

大正の中期五年余の歳月をかけ、旧司法省の直営工事として、囚人の労役をも投入し、年一層の割で煉瓦を積み上げ、入念に施工された旧庁舎は、正面中央に背いたドームをいたゞき、左右対称に整然といすわった軒高一五メートル、塔屋ボール先端まで二八メートル余

その煉瓦造りが竣工したとき、多くの人々を目を見はったことだろう。そして東外堀町から主税町にかけて道路拡幅がなされたとき、主税町は新しい時代を迎えた。

外部レンガタイルの割付け、腰ミカゲ石の目地割、目立たない柱壁、玄関、バルコニーや、正面ホールの手堅さ、そこには気負いはなく、一種の落着きを見せている。法廷建築家といわれ、努力家といわれた設計者、金刺氏の風格を偲ばせるものがある。そして、それはいろいろな意味において、旧時代のモニュメントである。

大正十二年、関東震災余波の洗礼をうけた以後、旧庁舎はあらまし次のような増築、改修がなされてきた。

昭和三年七月 旧陪審庁舎（西別館）増築
昭和八年一月 東別館増築
昭和十八年九月 防空倉庫増築
昭和二十四年一月 調停会館増築
昭和二十四年十二月 法廷会館増築
昭和三十七年七月 法廷別館増築
そして、本館及び庁舎の電話交換設備、電

気設備、暖房設備、内部塗装、屋根天然スレート葺き等の大規模な改修が戦後なされてきた。空襲による調停会館の焼失、暖房器具やボイラー等の供出、暗い裸電球下での執務、敗戦による法改革で内部改修をうけた法廷や事務室、その傷つけられた姿の中に、戦争の影響を強く残していた旧庁舎は、地震、戦争、台風等によって、痛めつけられながらも、今日まで五十七年間の歳月を生きたのびたのである。

今、軒端の銅板は破れ、壁は落ち、雨はもり、床はすりへった哀れな姿を前にして、戦後、増築や改修に手を下した一人として胸のいたむ想いがする。

しかし、任された老兵は、消えるべき運命であり、今その処分を待つ身だ。人去って乱れ飛ぶ銅板よ、もって暇すべしといいたい。

そして、裁判所が移転し、赤煉瓦の処分が決まるとともに、外堀町界隈もまた一つの新しい時代を迎えることだろう。

大正十一年の「新庁舎のしおり」末文に「……今日、明治十一年を回顧すると同様に、大正十一年を回顧して、隔世の感を感じ時が其内来るに相違ないと思はれる」と結ばれている。今その時にあたって、隔世の感を深くするとともに、新庁舎の偉容に対して、旧庁舎がそうであったような、一種のきびしさを感ずる。

主税町から名城郭内に庁舎移転の話が出たのは、旧庁舎の正面ホール天井ステンドグラスの組立て直しをした昭和四十六、七年のころだと思ふ。それから西小公園に敷地が決定し、建設省委任工事となり、着工式を挙げることでできたのは昭和五十七年七月二十六日であった。もちろん、それまでに地質調査は終り、最高裁、中部地建、地元裁判所において、基本計画が討議され、平面計画、階数、法廷数、構造計画、延面積、デザインの大要が決定されていた。敷地選定から基本計画の決定まで、当時のむづかしい情勢の中でその実現に努力された人達の苦勞は大変なものであった。

小生が新庁舎建設に直接タッチするようになったのは昭和五十一年四月からであり、基礎工事が終り鉄骨が地上に顔を出し始めたころである。数十枚の図面と、地元裁判所の要望事項をもって、中部地建の建築、電気、機械設備の設計官とともに最高裁に設計打合せに行ったのが最初であり、骨格の出来上った計画に肉付けをする作業であった。法廷の意匠、電気照明の方式、空調設備の系統、衛生器具の設置規格等が決められた。それらの多くは先年竣工した大阪高裁がモデルとされた。工事の設計、施工監理、予算支出は、中部地建の手で行われ、裁判所が直接工事にタッチすることはないにしても、地元裁判所、ユ

ザーとして、希望意見や必要事項を最高裁や中部地建に連絡していく。また、中部地建から大規模庁舎の委任工事として、裁判所の事務処理、庁舎管理、法廷の使用形態等いろいろ質問がくる。それらが庁舎新館三庁交渉委員会に諮られ、中部地建や最高裁に連絡される。この間、最高裁直営工事による仙台高裁庁舎が竣工し、今度は仙台に負けないようにとモデルチェンジがはかられた。

この三年間、初期の計画になかった北側底の設置を含めた構内北側動線の計画変更から、医務室、食堂、厨房の計画、大会議室の内装、周囲グリーンの石積まで、さまざまなことを中部地建に要望し、時には、無理難題と思われようようなこともあったが、よく受入れられ、今日のように完成されたのである。

近代的高層ビルとして生まれ変わった新庁舎は、高層ビルとしてのいろいろな制約をうけている。耐震性を増すための各階に配置された耐震壁、中央コア部分による事務棟、法廷棟の分離等、日常生活上にさまざまな不便を感じさせているかも知れないが、それらは構造上、防災上の制約がらきたものである。また、旧庁舎と比較にならないほど多くの機械、電気設備をもち、その設備の大部分は

の監視盤室で制御されている。

日常生活上必要な照明、空調、衛生、通信設備はもちろんのこと、防災上の非常警報、

自動火災報知設備、各種消火設備、避難施設の正常な維持、点検がなければ、新庁舎はその機能を発揮することもできないし、その中で生活できない近代ビルの宿命にある。

その中で働く職員は、健康で安全、快適、経済的で便利な状態、つまり人間の生存と生活に最も具合のよい効率的な状態を作り出し、それをいかに維持していくか、ここに旧庁舎の歩んだきびしさと通ったきびしい一面がある。省エネルギー時代といわれる時代に生まれたきびしさである。

移転して二ヶ月余、照明、換気、室内温度の調整等自主運転してまだ日が浅い。

今、冷房期を迎え、これらの機械の運転準備をしている段階であり、夏、冬の一シーズン試験期間である。予期しない初期故障の発生もありうるし、長期的展望に立った管理がより重要になってくるだろう。

現地に建替えられた大阪や仙台と違って、三の丸に新築された裁判所は新しい生活の広場をもつことになった。民家に囲まれた主税町から名城郭内、三の丸官庁街の新しい環境の中で、新庁舎は司法の殿堂として、周囲の緑の成長とともに、しだいに市民になじんでいくだろう。赤煉瓦とドームの旧庁舎、高層ビルの新庁舎、その二つの姿を重ね想うとき、まさに「建物は生きていく」との感を深くするものである。

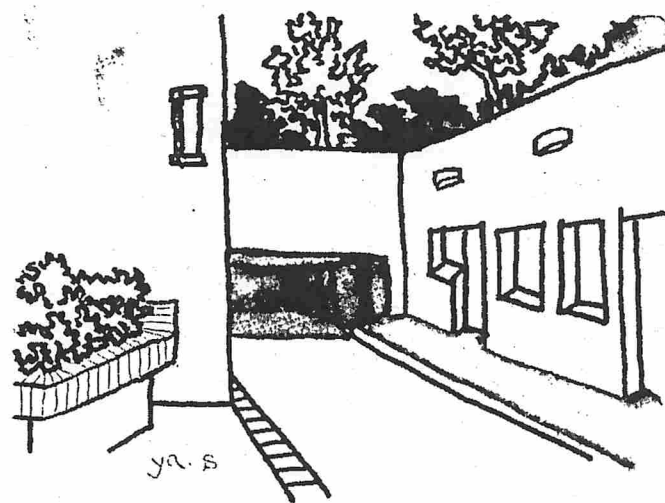
（名古屋地裁会計課長 佐藤 昌彦）

新旧庁舎十句

鬼頭弘

(名古屋第二検査事務局長)

赤煉瓦名残り春めく移転の日
新庁舎金鯢を指せば五月晴れ
梅一枝庁舎の窓に陽もあらた
法舎背に時雨いる城の白き壁
新緑や薄茶の映ゆる新庁舎
天窓の春陽も溜る新庁舎
春昏るる心触琴線絵の庁舎
春薄暮庁舎に魅入り句一句
春風や法殿堂の三の丸
時雨れば雨具彩る昇降機



民事記録庫の移転

坪内清彦

移転という二字は、記録係員に五十年か六十年に一度あるかないかの大事事をまかされているという使命感と、未経験ということからの不安感とをたせました。昭和五十三年六月初旬ごろの私達は一日も早く移転計画をたて、毎日少しずつ準備をしたいと思っていました。準備にとりかかってしまえば、移転の実感もわき、移転計画案もだんだん修正されて、より煮つまり、かんべきな移転につながっていくと思つたのです。しかし、計画をたてるといつても予算面に制約がある以上、なかなかうまくことは運びませんでした。夏もすぎ、移転時期も近づいてきたので、あらゆる場合を想定して、七つの移転計画案を作成しました。結局、最終的には記録の保存量約一、六七メートルをできるだけ減らし、ミカン箱をできるだけ買ってもらつて詰め、

私達記録係と民事部内の応援またはアルバイトによって、裁判所のトラックで運搬し、安全で確実な移転をすることに煮つまつたのです。移転準備は記録廃棄の促進と荷づくりを全力をあげ、十月二十一日から昭和五十四年一月十日まで続けました。一月十一日になって、予算の点はともかくとして、記録係として一番いい方法による移転をという地裁事務当局の配慮によって、運送業者には梱包と運搬をさせることに決まつたのです。一月十一日から二月十九日までの間は、ミカン箱の荷づくりを中止し、記録庫内の整理をすることにしました。それは、当時、保存棚の不足から二、三箇所に分散して保存してあつた記録を、できるだけ一箇所にまとめるために記録を大移動させたり、保存棚からはみ出した記録や、未保存記録をミカ

ン箱に詰め、記録庫内の通路に並べて積んだり、すでに荷づくりをして、記録庫内の通路に分散して積んであつたミカン箱を、新記録庫における配置を考慮して積みなおしたりしました。というのは、いままで記録庫は三つだったので、新庁舎では五つの記録庫へ分散することになるので、予め明確に区別しておかないと、作業に余分な手数と時間を必要とするからです。

そこで、収納先別に区別した荷札を大小合せて約九、七〇〇枚準備しました。荷札には一号記録庫を赤色、二号記録庫を青色、三号記録庫を黒色、四号記録庫を緑色、五号記録庫を白色と決めて記録庫を特定し、各記録庫内の保存棚は列ごとにA・B・C・・・の符号で特定し、更に、ある種類の記録をどの棚のどの位置から並べはじめるか、その箇所を指定するために付けた符号をイ・ロ・ハ・・・として、それぞれ荷札に表示しました。

荷札には、このほかに、指定箇所から記録を順次並べるため、指定箇所ごとに一からはじまる進行番号を付け、最終の番号には「オワリ」と付記しました。もちろんこれらの分類符号は、記録庫の入口や、棚、指定箇所にも表示しました。

この荷札は搬出・搬入の際に全くの素人にも格納個所が理解できるということになり、非常に役立ちました。特に搬入後の点検の際

には、その真価を発揮し、大成功だったと自信をもっていえます。

いよいよ、二月二十日から業者の荷づくり、搬出・搬入作業がはじまりました。記録係全員で手分けして荷札つけ、あるいは搬出・搬入の指示監視にあたりました。特に、荷札つけでは、時間外に上司の方にも率先して応援を、庶務係・事件係のみさんにも応援を、また、搬入の指示監視では、訟廷管理官・主任書記官のみさんにも応援をしていただきました。この作業は二月二十八日までかかる予定になっていましたが、二日間も早く二月二十六日で終わりました。

ほっとする間もなく、私達記録係は二月二十七日から三月一日まで搬入された記録が、指定した記録庫の、指定した保存棚の列の、指定した場所に、進行番号順に並んでいるかどうかを荷札によって点検したうえで、業者の荷ほどきに立会いました。

記録係事務室の移転は、三月二日に行われ、三月三日からは新庁舎における事務が開始されました。私達が移転準備で荷づくりをしたミカン箱は、三月五日から三月九日までの間に、民事部暫定配置の書研修了者のみなさんの応援をうけて、私達記録係員の手で荷ほどきをし、各記録庫内の整備をすべて終ったのです。

これで、やっと、移転は完了しました。私

達が具体的な移転準備をはじめてから十箇月の期間がかかっています。正直言って、業者は引越の専門家、私達は素人の素人、うまくいくかどうか本心に心配しました。特に記録が一件でも紛失したらと考えると、夜半に気がかりで眠れないこともありました。

それから、移転作業中における記録係の受付事務ですが、なにぶんにも記録を並べる棚は実に二、三六棚に及びました。このようになほ大なるものであったにもかかわらず、執行文付与・諸証明・閲覧謄写は、移転準備期間中はもちろんのこと、搬出・搬入の際にも停止をする必要がありませんでした。すなわち、必要な記録等は移転前については、荷づくりをしたミカン箱を開封して容易に取り出すことができたほか、新記録庫へ搬入した後指定場所に完全に整然と格納されていたことから、直ちに取り出すことができ、全く事務に支障をきたすことはありませんでした。

移転はすべてうまくいきました。それはなによりもかんばしに近い記録係内のチームワークと具体的・詳細な移転計画をもったことと、事務局の配慮、地裁民事首席書記官はじめみなさんの応援があったればこそと思います。おわりになりましたが、御配慮・御援助下さいましたみなさんに、私達記録係員一同、心からお礼を申し上げます。

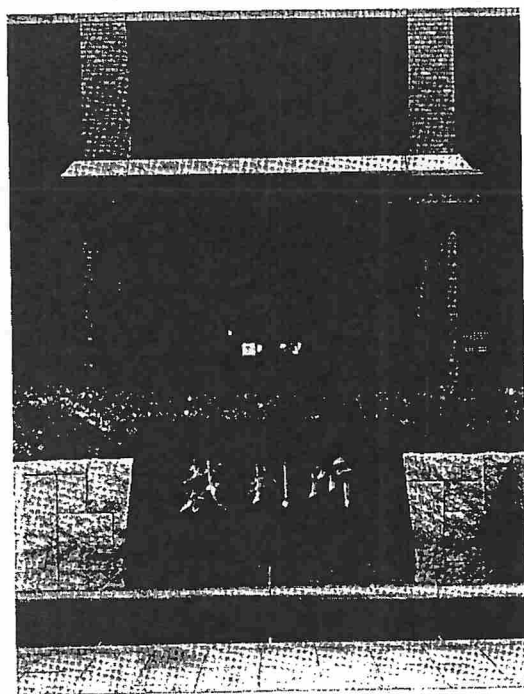
(名古屋地裁民事訟廷記録係長)

庁名碑雑感

朝日 晃

名城郭内、三の丸の一角に堂々と偉容を誇る新庁舎、その南側正面グリーンベルトに、庁舎の赤茶色とは対照的な黒みかげ石の庁名

碑がある。大きさは縦一米、横二米もあろうか、「裁判所」と刻み込まれた庁名碑は、新庁舎の偉容とあいまって、まさに迫りを睥睨する



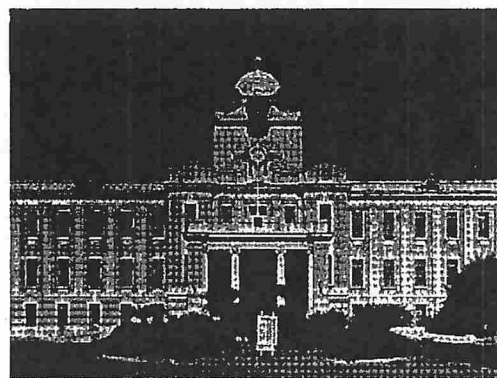
庁舎南玄関と庁名碑

るの感がある。その刻も「裁判所」の三文字をしつかと石にくい込ませ、微動だにせぬ気概と迫力をもった素晴らしい出来であり、しかも今日の機械ばかりではなく、手ばかりであると聞いているが、石工の労苦も察せられることではある。

さて、その「裁判所」の三文字であるが、これは先に庁報「高裁なごや」の新庁舎たよりに紹介されたところ、氏の手になる。

旧庁舎の正面、向って右側の門柱に、名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所、名古屋簡易裁判所の三庁名を刻み込んだ大理石の庁名板があったことに気付いていた人もあると思うが、その庁名板から「裁判所」の三文字を拡大し、新庁舎の庁名碑に転写したものという。旧庁舎のそれは方寸の細字であった。それを方尺に拡大したとき、果たして元の風格を保ち得るものだろうか。危惧はあったであろう。元の細字を写真にとり引き伸ばし、担畳一枚分の大きさの板に並べてみるなど、担当者の技術面の苦心も思われる。だが、危惧は杞憂だった。拡大しても美しいものはやはり依然として美しかったのである。高麗な品格も失わなかった。新庁舎の庁名碑としてふさわしい書が、工事完成のとき、そこにあったのである。

小字を書いて大らかさを持ち、大字に引き



旧庁舎正面

伸ばして均衡美とゆるぎない構築性を見せる
■氏の手腕に敬意を表さざるを得ない。

ところで、もう一度庁名碑の書を見てみよう。一見して顔法とわかる書体である。

顔法とは、中国唐宋の博学な文人であると同時に、玄宗の時代に平原の太守として安祿山の乱を討伐した英雄顔真卿が打ち立てた書風である。顔真卿は後に徳宗の時代、李希烈の反乱に際して捕われの身となり、節をまげず遂に殺されるに至ったのだが、そういう忠義烈士、剛直の人らしく重厚な書を残している。顔真卿の書は、書聖といわれた晋の王羲之の、洗練、典雅、緊密に対して豪放、雄渾、鷹揚と言いつける。かたちで言うならば、縦面が互いに背り合うのではなく、互いに向き合うかたちになり、横の線にくらべて縦の線が太いという特異な骨格の構成となる。

茶人、華人としても名声を馳せ、文人趣味をもって聞こえた■氏が楷書は専ら顔真卿に心酔した。そして裁判所旧庁舎の庁名板の揮毫を依頼されるや、躊躇することなく顔法に取り組んだ。その心の中は今、推しはかるすべもないが、かつて自らが若き頃奉職した司法の殿堂「裁判所」と中国の偉人顔真卿のイメージが、どこでどう重なり合ったのであろうか。茶を愛し、花を愛した■氏も晩年は中風のため、左半身不随の悲運に

見舞われたが、その間も左手隻腕で書作を続け、執念の書は見る者をして襟を正さしめるものがあつたことを忘れ得ない。

なお、蛇足だが、現在一番多く使用されている活字、明朝活字体が顔真卿の楷書をもとにしてデザインされたものであることを付記しておく。

(斎藤緑蔭・課長補佐)



編集後記

▼待望久しかった新庁舎が官公庁街の名城郭内に完成し、三月には、長年の風雪に耐えた、あの懐かしい赤れんがの旧庁舎から、無事引っ越しを終え、新庁舎での執務が開始された。また、六月二日には、落成式が挙行され、多数の御祝辞をいただいた。

▼この新庁舎が出来るまでには、敷地の選定・確保から建築工事にいたるまで、多数の人々の御苦勞があつたことは多言を要しないが、新庁舎の落成に際し、その御苦勞の一端や感想など貴重なお話を御寄稿いただき、高・地裁庁報号外の「新庁舎落成記念号」として、本号を発行することができた。御協力いただいた方がたに心からお礼申し上げる。

▼ほかに、職員各位の新庁舎へ入った感想・旧庁舎の思い出、座談会なども企画していたが、今回は中止した。これらは九月号以降の庁報にのしどし御寄稿いただけるものと思う。今後とも、各位のあたたかい御支援をお願い申し上げます。